コードギアス　魔王の騎士は忠臣だけど、変態というなの紳士でした

八神刹那24

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ルルーシュのそばに忠誠を誓う騎士であり、親友でもあるオリ主が加わります。ルルーシュとナナリーに対する忠誠心（友情）はメーターふりきっています。

基本的には原作（アニメ）沿い。ＬＯＳＴ　ＣＯＬＯＲＳを参考にしている場面があります。

復活のルルーシュみた熱意でやっています。ルルーシュ、Ｃ．Ｃ、ナナリーをもっと幸せにしたい気持ちでやっていきます。

目次

第一話　クレイ・ロペス　1
第二話　初陣　5
第三話　邪魔者　10
第四話　ヴィレッタとランチ　13
第五話　オレンジ　16
第六話　ゼロとクレイ　20
第七話　膝枕と内輪もめ　24
第八話　コーネリア　29
第九話　運命の出会い・ミレイ　33
第十話　選択　37
第十一話　再会　40
第十二話　学園生活　44
第十三話　初恋　47
第十四話　猫とキス　50
第十五話　仮面告白大会　55
第十六話　C．Cはベッドに横たわっている　58
第十七話　ホテルジャック　62
第十八話　ホテルジャック　その2　67
第十九話　ブリタニアの黒獅子　70
第二十話　会長チョ～ップ！　73
第二十一話　カレン　77
第二十二話　ナナリーとの約束　83
第二十三話　C．Cがシャワールームに入って来た　88
第二十四話　お前が導いてやれ　92

第二十五話　騎士と姫 ―――― 95
第二十六話　黒の騎士団への入団 ―――― 99
第二十七話　猫コスプレ ―――― 102
第二十八話　リフレイン ―――― 104
第二十九話　幸せな時間 ―――― 108
第三十話　紅蓮 ―――― 111

第一話　クレイ・ロペス

「ルルーシュ、お前なら必ず最高の皇帝になれるさ。俺が保証する。」
「俺が皇帝？何言っているんだよ、クレイ。俺は第１１皇子・第１７皇位継承者だぞ。」
「何番目に生まれたのかは問題じゃないだろう。ブリタニアは弱肉強食の実力主義だ。」
「だとしてもシュナイゼル兄上だっているんだぞ。俺は兄上に一度も勝てたことがない。」
「今はそうだとしても必ず将来はお前が勝つさ。俺にはわかる。」
「まったく、お前のその絶対的な自信はどこから来るんだ？仮に俺が最高の皇帝とやらになれたとしたらお前は何になるんだ？」
「決まっているだろう。俺はお前を、お前とナナリーを守る騎士になる。それも最強の騎士だ。お前達のことは俺が守るよ。命に代えても」
「相変わらずお前の忠義心は重たいな。だが最高の皇帝と最強の騎士か。もしできたら最良の組み合わせだな。できるか？」
「できるさ。お前と俺ならなんだってできる。なんたって俺たちが手を組めば」
「「　不可能はない　」」
二人に少年の無邪気な笑い声がひろがっていった。

人には生きる目的が必要だ。俺の、クレイ・ロペスの生きる目的は二つある。一つは父親が殺された時の真相を明かすこと。
父はマリアンヌ様の護衛をしていたが、彼女が殺された時に殺された。騎士として皇族を守れなかったことを非難され、我がロペス家は落ちぶれていった。事件は賊による襲撃として終わらされた。だが俺は納得なんてできなかった。誰よりも強く気高かったあの父が、たかが賊ごときに遅れをとるはずがない。必ずなにかあったはずなん

だ。父の汚名は俺が晴らす。
二つ目は親友であり俺が生涯の忠誠を誓うと決めたルルーシュ殿下とナナリー皇女殿下をお探しすること。
二人は事件の後日本に人質として送られ、戦時中に死んだと公表された。だが死体は見つかっていない。二人が生きている可能性がわずかでもあるのなら希望はある。この世に絶対はあり得ない。例え絶望的な数字だろうとゼロでないならあきらめる道理はない。
ルルーシュ様達が日本に送られるとき、何もできなかった。俺に力が無かったからだ。だから俺はあの日から己を鍛えることに全力を注ぎ込んだ。体を鍛え、戦闘技術、ナイトメアの操縦技術を鍛え、学問を学んだ。貴族としての誇りを捨て、頭を下げ、泥水をすすってでも生きてきた。全てはこの目的のため。目的のためならどんなことにも耐えてみせる。

自分でいうの何だが俺にもそれなりの才能があるようだ。才能と努力により、軍事学校を主席で卒業できた。卒業時成績上位者は希望する部署への配属希望ができる。俺はエリア11を希望した。理由は当然ルルーシュ様、ナナリー様の手がかり探すためだ。テロリストの抵抗が激しいこの地なら手柄を立てることも可能だ。まさに一石二鳥。
今日は軍に配属されての初日。一度深呼吸し、名乗りを上げる。
「本日よりこちらに配属されたクレイ・ロペスです。よろしくお願いします」
「おお！よく来てくれた、クレイ。すっかり立派になって見違えたぞ。その獅子を彷彿される金髪に蒼い眼光。お父上にそっくりだ」
「ありがとうございます。ジェレミア卿のご活躍は聞き及んでいます。父も喜んでいるでしょう」
俺を笑顔で迎えてくれた男の名はジェレミア・ゴットバルト。かつて父に若いときから鍛えられ、軍属後父の部下としてマリアンヌ様の護衛を行っていた。父の死後も何度か連絡をくれた。義理人情にあつい男だ。

今はエリア１１で自身が結成した『純血派』を率いている。俺がエリア１１に配属を希望しているのを聞きつけて、真っ先に自分の部隊に誘ってくれた。
「軍学校を主席で卒業とは、流石はレックス卿のご子息だ。お父上も誇りに思ってくださっているだろう。君の活躍には私も大いに期待している」
「ありがとうございます。ご期待にそえるよう精進いたします」
ジェレミア卿は俺の返事に満足して頷くと隣の女性を紹介した。
女性の名はヴィレッタ・ヌゥ。俺の教育係だそうだ。気にかけている俺に付けるくらいだから優秀なのは間違いないだろう。そして何より俺が嬉しかったのは彼女が美人だったことだ。昔からなぜか年上の長髪の美人にめがない。気が強い女性ならなお良し。
「ありがとうございます。ジェレミア卿。このような美人を付けてくれるとは感謝のしようがありません」
「ふふ、やはり君はレックス卿の息子だな。あの方も女性にはめがなかった。私からみたら些か軽すぎるほどだったがな。」
「良い男は良い女にもてる。周りに良い女が多いのは良い男の証だといつも言っていましたからね」
俺が幼い頃に母を亡くしてから、女にはだらしなかった父だが、真に愛したのは母一人だったらしい。
「クレイです。よろしくお願いします。ヴィレッタ卿」
「ああ。お前の話はジェレミア卿より聞いている。私も期待させてもらうぞ」
「ありがとうございます。ところでヴィレッタ卿はお付き合いされている男性はいるんでしょうか？」
「……はっ？いきなりなんだ」
「父に良い女性に出会ったらとりあえずアプローチしておけと教えられています。ジェレミア卿が選んだ御方なのだから優秀なのは間違いない。そしてなにより美人だ。放っておかない手はないでしょう」
「まったく。だからといって会ってすぐに教育係をナンパするのは

どうなんだ?」
「人生は一度きり。人間いつ死ぬかわかりません。今ある幸せがなんの前触れもなく終わることは父と母の死で経験済みです。ですから自分は日々の選択に後悔はしたくありません」
「……私の好意を得たいのであれば私に認められる姿を示すことだな」
もちろん手柄は立てますよ。ここで手柄をあげて俺は上に行く。軍での地位を上げる。皇族に会えるようになるまでに。
事件の真相を追うことについての現在の目標はコーネリア様にお会いすることだ。彼女は当時マリアンヌ様の護衛隊長だった。彼女なら事件について何か知っているかもしれない。いや、知っているはずだと自分に言い聞かしてきた。
挨拶も終わり、施設内の案内をしてもらうことになったとき、警報が鳴り響く。
ジェレミア卿のもとにテロリストの襲撃の知らせが入る。
「クレイ。初日にいきなりだが、出撃命令が出た。いけるか?」
「問題ありません。いきます」
初日に出撃とは予想外だったが運が良いとも言える。
必ず手柄を立て、俺は上に行く。

第二話　初陣

意気込んで出てきたのはいいが相手が強奪されたトレーラー一隻だとは拍子抜けもいいところだ。これでは捕縛できても手柄にはならないな。

「どうするクレイ。君がいくかね？」

「初陣ですので、まずはジェレミア卿の手腕をみせて頂きたいですね」

「よかろう。このジェレミア・ゴットバルドの活躍をとくと見るがいい！ヴィレッタ、クレイのことは任せるぞ」

「イエス、マイ・ロード」

「申し訳ありません。ヴィレッタ卿。子守をさせてしまって」

「気にするな。初陣は誰でも経験する。まずは場の空気に慣れておけ。」

「それにしてもやっぱりブリタニアの女性パイロットスーツはすごいですよね。この事件が終わったらじっくり見せてくださいよ」

「それはセクハラだぞ。殴られたいか？」

「美人でスタイル抜群。男なら誰だって目を奪われてしまいますよ」

「よし分かった。あとで殴ったあとに説教だ」

「美人から愛ある説教。ご褒美です」

ジェレミア卿が僚機をつれ先行していくと、なかからＫＭＦ（ナイト・メア・フレーム）のグラスゴーが飛び出してきた。ＫＭＦが出てきたことは少し驚いたが、旧式一機では結果は変わらないだろう。

すぐに方が着くと思ったが、思いの外相手が手強い。旧式、しかも満足な整備もされていないであろう機体で上手く立ち回っている。操縦者の腕がいいのだろう。たかがテロリストと安易に考えたのは軽率だったな。

ジェレミア卿が敵を討つのに手間取る、いや狩りを楽しんでいると、第三皇子クロヴィスの名で新宿の壊滅が命令される。このタイミ

ングで何故急に掃討なんだ？民間人を虐殺してまで何がしたい？
……何か探しているのか？
だがなんだ？新宿一帯はそれなりのイレブンがいるはずだ。それら全てを排除してまで探すもの。上に聞いたとしても当然機密事項だろう。それどころか関心をもっただけでも排除の対象になるかもしれない。危ない橋は渡るべきではない。俺の目的には関係ないだろう。
「いくぞ、クレイ」
「気が進みませんよ、ヴィレッタ卿。イレブンとはいえ自国の民間人を撃つなんて。敵でもない、手柄にもならない相手殺してなにが楽しいんですか？自分は快楽殺人者じゃありませんよ」
「命令だ。軍人は命令を遂行するのが仕事だ。そこに個人の感情は必要ない。それぐらいわかっているだろう」
分かっている。分かっているとも。目的の為にならなんでもやる。とっくの昔に自信の主義主張なんてものは捨てている。
「とにかく撃ちたくないというのなら別にかまわん。私の後ろについてこい」
「イエス、マイ・ロード」

ヴィレッタ卿の後に続くとすぐにジェレミア卿とその僚機が敵に討たれた。幸い両者とも脱出したので無事のようだが、敵に純血派のサザーランドが強奪されたようだ。まったくどこの馬鹿だ。テロリストにＫＭＦを奪われるなんて。
そこから一気に流れが変わった。相手に勢いが出てきた。どうやって手に入れたからわかないが多くのＫＭＦを手に入れたようで、味方が次々にやられていく。囮のグラスゴーで場をかき乱し、浮いた駒から確実にとっていく。
優秀な指揮官が現れたか。
それにしてもこちらの指揮はだらしがないな。まるで素人だ。目の前の一手しかみていない。だから先を読んでいる相手に負け続けるんだ。こんな奴の指揮で死ぬのはごめんだな。

多くの味方が一点を囲み集まっていく。馬鹿が明らかに罠だろう。唯一場所が分かるグラスゴーは完全に囮。奴を追いかけて集まったところを一網打尽だ。外を囲んで殲滅する戦力は流石にないだろうならば地下か。集まったところを地下から攻撃して地盤沈下。多数の機体の重みが加わり大崩落を起こすだろう。

予想通り地下が崩され集合していた味方は全滅だ。くそが。指揮官が無能だと部下が無駄死にだ。

ルルーシュ。お前ならこんな無様なことにはならないだろうな。

だがここが俺にとって千載一遇のチャンスだ。敵の指揮官を一気に叩く。完全に組織された軍ではないはずだ。あとから現れた指揮官さえ叩けば、有象無象の雑魚だ。

「ヴィレッタ卿、俺一人で行きます。識別信号はカットします。相手はこちらの信号を見て動いていますから。単機突入により一気に敵の指揮官を潰します。」

「まて、クレイ。危険だ。第一敵の指揮官の場所がわかるのか？」

「これまでの敵の動きで見当は付けました。自信はあります。当たっていたらご褒美くださいね。膝枕を希望します」

雑魚は無視だ。後からいくらでも処理できる。相手はすでに勝った気でいるだろう。レーダー頼りなら信号なしの相手がいるとは思ってもいないだろう。味方からの誤射の危険も伴うが、その味方がお前のおかげで今はこっち側にはろくにいないからな。

目的の場所まで一気に進みＫＭＦの熱源をこちらのレーダーが感知した。

ビンゴ！

信頼できる部下ならそばに置くだろうが、そうでないのなら単機のはず。という俺の予想は当たり、敵は単機だ。ならばあとは一騎討ちでやつをとれば終わりだ。

ルルーシュ・ランペルージは自身が出した結果に歓喜していた。自分の采配でただのテロリストがブリタニアの正規軍に圧勝したのだから無理もない。他者を操る強力な力であるギアスを手に入れ、自分の指揮能力も証明された。

あとは残った敵をたたき、クロヴィスまでの道を確保すればチェックだ。ルルーシュがレーダーを確認していると何かが当たる音と衝撃がした。ふと顔を上げると一機のサザーランドが上がってきた。

レーダーに反応は無かった。なぜ？　識別信号を切っていた？

それよりなぜこの場所がわかった？

いくら味方が減ったとはいえ、識別信号を切っての探索は危険なはずだ。

こちらの居場所が分かった上での強行策のはずだ。

混乱し、思考がまとまらないルルーシュにサザーランドは突っ込んでくる。敵のスタントンファの一撃をかろうじて防ぐが、連続で攻撃を受け機体が悲鳴を上げる。同じ機体でまるで違う動き。相手は明らかに自分よりＫＭＦの腕前は格上だ。敵が次のアクションをおこす前に床に向けスラッシュハーケンを撃ち、床を崩す。崩落により地上に着いたルルーシュは脱出をはかろうとするが、相手は信じられない動きで落下ではなく、着地をしてすぐさま攻撃に転じてきた。

やられるっ！と思った瞬間。敵のサザーランドに例のグラスゴーが襲いかかる。

「おい！借りは返すぞ！」

声と共にグラスゴーがスラッシュハーケンを放つが、相手は何でも無いようにはじき返す。敵が攻撃してくるのを察知し、グラスゴーのパイロットは脱出した。

その隙にルルーシュはその場から逃げ出していた。実戦の要は人だと改め、己の課題を考えていると、警報が鳴った。

敵のサザーランドが追ってきていた。本来なら同じ機体。唯の直線なら追いつけないはずだったが、こちらは無様な落下により足にダメージあり、相手は華麗な着地により損傷はない。しだいに距離は縮まっていく。

ルルーシュは持っていたアサルトライフルを撃つが難なくかわされる。ならばと横のビルを撃ち瓦礫で潰そうとするが、ハーケンとトンファでくぐり抜けてくる。
腕がたつなんてレベルではなかった。瞬く間に距離を詰められる。
敵に追われ、無様に逃げながらルルーシュはある男と言葉を思い出していた。
『俺はお前を、お前とナナリーを守る騎士になる。それも最強の騎士だ。お前達のことは俺が守るよ。命に代えても』
クレイ……お前がいてくれたら。
もう会うことはない友の顔と誓いの言葉を思い出し、ルルーシュの目に涙が浮かんだ。

第三話　邪魔者

敵の指揮官を追い詰め次の一撃で仕留められると確信し、右腕のスタントンファを叩き込もうとしたとき、視界の端に民間人の親子が入ってきた。

幼い娘を抱いている母親。

どうする!?今攻撃すれば巻き込んで殺してしまうだろう。だがもう攻撃のモーションに入ってしまった。止めるには反対の方角に倒れ込むしかない。だがそうしたら取り逃がしてしまう。

ここまでの被害を出した敵の指揮官を単機で仕留めたという手柄がなくなってしまう。下手をすれば命令無視の単独行動により処罰されるかもしれない。最悪出世の道が閉ざされる可能性だってある。

迷うな!俺はどんなことをしてでも、ルルーシュとナナリーのそばに行かなくてはならないんだ!それが、それだけが俺が生きる希望だ。

腕を振り抜く瞬間、強烈な衝撃と共に機体が吹き飛ばされる。何が起きたのか分からなかった。状況を確認しようとあたりをみると、見たことがない白いＫＭＦが俺を抱えるように倒れていた。最初状況が理解できなかったが、すぐにこの白いのが邪魔をしたのがわかった。

「貴様!なんのつもりだ。人の手柄を邪魔しやがって!!」

「あのまま攻撃していたらあの親子を巻き込んでいた!!」

怒りで怒鳴る俺に負けないぐらいの大声で相手が返してくる。

またしても何言っているのか分からなかった。ブリタニアの騎士が、たかがイレブンの親子のために味方の功績を妨害し、敵を逃がすだと?

くそっ!手柄を取り損ねた。この場合はどうなる?こいつが邪魔しなければ確実にとれていたんだ。責任はこいつに負わすしかない。だがどう見ても新型だ。こいつの上にはお偉いさんがついているはず。このことを無かったとこにして、敵に逃げられた全責任を俺に押しつけてくる場合がある。そうなったらお仕舞いだ。

今の衝撃で機体は完全に壊れた。もう一度追うことも、残った雑魚を潰しにいくこともできない。完全なお手上げだ。
どうする？どうする？どうする？
「大丈夫ですか？怪我はありませんか」
俺の焦りもお構いなく、イレブンの親子の無事を確認する相手にきれた。
「ふざけるな!!こっちはお前のせいで全てが終わるかもしれないんだ！殺されたくなかったらさっさと消えろ！」
少し静止したあと、白いＫＭＦはこの場を離れていった。
俺はコックピットの中でうなだれた。どうするってどうしようもないだろう。

しばらくすると今度はクロヴィス殿下の名で終戦命令がでた。しかも負傷者はイレブンもブリタニア人同様に手当てしろだと？皆殺しにしろといったその口で、すぐに助けろとはどういうことだ。やはり今回のことは何かおかしい。
その後助けに来てくれたヴィレッタさんに救助され、ジェレミアさんの待つ純血派に連れて行ってもらった。もちろんヴィレッタさんには厳しいおしかりを受けた。美人に怒られる。本当ならご褒美なのだが、残念ながら今はそれどころではなかった。
事情をきいたジェレミアさんができる限り手をうってくれるそうだが、どうなるかわからない。ジェレミアさんより発言力のある人がでてきたらどうしようもないだろう。
俺の不安は最悪のケースになってしまった。本部よりクロヴィス殿下が何者かに暗殺されたとの連絡が来たのだ。
マリアンヌ様と父が殺された事件が脳内を駆け抜け、体が震えだした。
「俺が、俺があいつを取り逃がしたせいでクロヴィス殿下が。……俺があそこで迷わなければ、もっとうまくやっていれば」
「違うぞ、絶対に違うからな。お前だけがあいつの居場所をみつけ、追い詰められたんだ。お前のせいなんかじゃない」

震える俺をヴィレッタさんは強く抱きしめれてくれた。俺の頭を何度も優しく撫でながら大丈夫だと言ってくれた。

ジェレミア・ゴットバルドは怒りに燃えていた。クロヴィス殿下の命を奪った犯人に、何故かそばを離れた側近達に、そしてなによりまたしても何もできなかった自分自身に。

敬愛していたマリアンヌ、最も尊敬していた男を殺された時何もできなかった。そして今度も自身が近くにいたのに、またしても皇族を殺され、尊敬していた男の息子に不名誉な傷を付けてしまうかもしれない。

どこもかしこも大混乱だった。クロヴィスが殺されたことはもちろんだが、この間の戦いでおった被害。戦死者の確認、壊されたＫＭＦの補充、新宿での大量虐殺の隠蔽。やらなければならないことが多すぎる。

エリア１１始まって以来の大敗北だ。

自分がやらなければならいことは、暗殺者の逮捕だ。クロヴィスの側近達は話にならない。誰に聞いても覚えていないと言う。責任を逃れるために口裏を合わせているとしか思えない。ただ一つ気になるは純血派の同士である、キューエル卿が自身のＫＭＦを敵に奪われたことを覚えていないと証言していることだ。

殺害現場の近くから拳銃が発見され、線条痕を調べた結果クロヴィスの殺害に使われたものと判明した。指紋も検出され、名誉ブリタニア人の枢木スザクだとわかった。彼は日本最後の総理大臣の嫡子。動機も十分あった。

……彼で間違いないだろう。

犯人を公開処刑し、純血派により治安を維持する。それが自分の役目だ。

第四話　ヴィレッタとランチ

クロヴィス殿下の暗殺から数日が経過した。ようやく俺の心も落ち着いてきた。

ジェレミア卿は名誉ブリタニア人の枢木スザクを実行犯だと発表した。確かに凶器という決定的な証拠に、日本の最後の総理大臣の嫡子という動機もある。犯人だとしてもおかしくはない。

だがそんなに単純でいいのか？ずっと機会をうかがう忍耐力があれば凶器を処分する程度の頭はあるはずだ。殺したことで満足したのか？なら逃げるのはおかしいだろう。仇討ちに満足したのなら、日本人なら切腹とやらをして自害したほうがまだ納得できる。

俺としては俺が取り逃した例の指揮官だと思っている。だが何の手がかりも無い上に、俺の責任問題になる可能性だってある。完全な他人である奴のためにリスクを負う気はない。俺の目的の為にはリスク覚悟で奴を弁護する必要は無い。

第一俺のような若造が訴えても意味が無いだろう。もうシナリオは完成されている。

クロヴィス殿下が亡くなったことにより、新宿での真相は分からずじまい。裏でなにか面倒なことがきていて、そのせいで亡くなった気がしてならない。もちろん俺に確かめる気など無い。俺が忠誠を誓うのはルルーシュ様とナナリー様のお二人だけだ。それ以外の皇族がどうなろうが知ったことじゃない。この点はジェレミア卿とは考えが違うところだな。彼もかつては父と同じくマリアンヌ様を敬愛していたが、彼女が死んでからは皇族全体への忠義に変わった。

俺の父もかつては皇帝陛下直属の最強部隊『ナイトオブラウンズ』に選考されるほどの実力者だったが、マリアンヌ様を敬愛し、彼女だけの騎士になることを選んだ変わり者だった。

「すまない、遅くなった」

公園のベンチに座り考え込んでいると俺を公園に呼んだ張本人、ヴィレッタさんが現れた。手には大きめのバスケット持っていて、

走ったのか顔が若干赤くなっていた。
「全然平気ですよ。たいして待っていません。女性を待たせるわけにはいかないので早めに来ていただけです。それに仮に待たされたとしても、あなたのような美人のためならいくらでも待ちますよ」
「まったく、お前はすぐにそうやって馬鹿なことを言う。この間まで泣きそうな奴の台詞とは思えんな」
「いじめないでくださいよ。あの時のことは本当に感謝しています。会ったばかりの自分のそばにずっとついて励ましてくれました。落ち着けたのはあなたのおかげです」
「震えて泣きそうになっている子供を放っておけなかっただけだ。……ところで昼食はまだだよな？ちょうど昼時だし……ランチを用意してみたのだが……」
「え!?俺のためにつくってくれたんですか？」
「あ、ああ。……ついでにな。一人分も二人分もかわらないからな」
ランチを手際よく広げるヴィレッタさん。どの料理も昼時とは思えないような本格的なものがならぶ。いい匂いに腹が空腹を訴える。
「いやこれはすごいな。ヴィレッタさんは料理が得意なんですね。じゃあ、これをもらいますね」
「味はどうだ……!?」
「これすごく美味しいですよ！こんな本格的な料理作れたんですね」
仕事一筋の生真面目軍人だと思っていたので驚いた。
「そ、そうか。それはよかった。こっちも食べてみてくれないか？」
ヴィレッタさんがすすめる料理を食べてみたが、これもやはり美味しい。
「こんなに料理が上手いなんて。どこで勉強したんですか？」
「プライベートではよく、自分で食事を作るのでな」
「こんな美味しい手料理を毎日食べられるなんて、結婚したら旦那さんが幸せですね」
「バ、バカなことを！結婚なんて考えたこともない！」
「そうなんですか？それはもったいない。ヴィレッタさんほどの美人なら、男が放っておくはずがないはずなのに」

「バカなこと言っていないで、さっさと食べてしまえ！」
顔を真っ赤にして怒るヴィレッタさんに思わず笑ってしまう。

「ごちそうさまです。本当に美味しかったですよ」
「また機会があればランチを作ってくるよ。……では失礼する」
ぱぱっと片付けてヴィレッタさんは逃げるように帰ろうとする。
「ヴィレッタさん。今日はありがとうございました。俺を励まそうとランチをごちそうしてくれたんですよね。おかげで元気になりました。父がよく言っていました。女に甘えるのは男の特権。ただし甘えた分はきっちり強くなれって。あなたが甘えさせてくれた分、俺は必ず強くなります」
ヴィレッタさんは俺の言葉に振り返り頷くと走っていった。

ヴィッレタ・ヌゥは熱い顔と高鳴る鼓動に戸惑っていた。
クレイ・ロペス。奴は不思議な男だ。
初めて会ったときは生意気なガキだった。
単機で突入していったときは飢えた獣だった。
敵を打ち損じたときは怯える子供だった。
私の料理を美味しそうに食べるときは無邪気な子供だった。
甘えた分強くなると宣言したときは……。
出会ってまだ一週間足らずの男にヴィレッタの心は乱されつつあった。

第五話　オレンジ

エリア11はジェレミア卿が代理執政官として掌握していた。あの混乱のなかよくまとめたと感心するが、不安もある。彼は確かに優秀な騎士だ。

ＫＭＦの操縦技術はラウンズの候補にもなるほどであり、人を引きつけるカリスマもある。しかしそれは騎士としてのはなしだ。一国を運営していくだけの力量はないだろう。

純血派による軍部の掌握はいいが、その力で内政府まで手を出すのはやりすぎのようなきがする。軍が力で支配する国にろくなのはないだろう。

現在、枢木スザクは軍事法廷に移送されている。声を上げることを封じる首輪を付け、顔がよく見えるようにと、さらされている。護衛はジェレミア卿、キューエル卿、ヴィレッタさん、俺の四人が対象を囲む形で配置につき、上空にも四機待機している。

ここら辺も趣味が合わないところだ。罪人をさらすことは昔からある手だが、個人的には嫌いだ。どうせ殺すのならさっさと殺して終わらすべきだ。

マリアンヌ様を守れず殺された父を無駄死にだと、役目も果たせない愚か者だとあざ笑う連中を思い出し、怒りがこみ上げてくる。

枢木スザクを英雄視し、奪還を企てるものがくる可能性が高い。日本解放戦線がくるとの想定だが個人的には例の指揮官がくると思っている。

枢木はほぼ間違いなくやっていないだろう。ああいうタイプは暗殺なんて卑怯なことはしない、と言うだろう。俺も暗殺は好みでは無いが、必要ならやる。枢木スザク奴とは意見が合う気がしないな。

皇族殺害は反乱分子にとって絶大な人気を得るチャンスだろう。英雄として崇められ、力をかすものが集う。こんな魅力的な広告を手放すてはない。必ず名乗り出るだろう。今度は逃がさん。逆に皇族殺しを捕まえた功績を手に入れさせてもらうよ。

だが当然向こうも無策ではこない。何かやってくるはずだ。もし

相手にルルーシュ様級の知略があれば勝てる気がしない。
かつてチェスであのかたに勝てたことがない。こちらが勝てると思ったとしても、いつも最後は負けた。仮想シュナイゼル様として何度やらされたか。ぎりぎりの勝負だからこそ楽しいとはよく言ってくれていたが、俺をその気にさせるリップサービスだろう。
沿道に人だかりができている場所にきた。ジェレミア卿のしこみで愛国的ブリタニア人が集められている。こういった演出が好きな人だからな。
枢木スザクに容赦の無い罵声が浴びせられていく。口だけの連中。こういった奴らは反吐がでる。こいつらみたいなのが俺の父を侮辱しやがったんだ。
大勢の民衆がいるもっとも注目される場所。仕掛けるのなら間違いなくここだ。注目されるから困難であり、やり遂げたときのインパクトも上がる。もっともそれをやってのける策略があるのが前提だが。ただ民衆を人質にしただけでは野蛮ですまされる。その後に可能性はない。
前方からクロヴィス殿下専用車がやってきた。こちらの前で止まると炎が上がり壁が燃えきえると中から黒の仮面つけた奴が現れた。
「……私はゼロ」
仮面のものは自らをゼロと名乗った。声からして男か？いや、仮面なら変声機をつけられる。すぐにジェレミア卿の合図で上空に待機していたサザーランドが降下し、取り囲む。ここからどうするつもりだ？気になるのは奴の乗ってきた車。後ろに何か積んでいるのか？
ゼロが右腕を高く上げ指を鳴らすと後ろの壁が壊れ、中から半球状の装置が出てきた。手袋しているのになんであんないい音出たんだ？ってそんなことよりあの装置はまずい。あれは新宿で問題になった、毒ガスが入っているやつだ。
なるほどただ銃を構えるより効果的だ。当事者以外にはなんの装置か分からない。こちらとしても、あれがどれほどの被害を出すかわからない。面倒なものをもってきたな。
ゼロは毒ガスと枢木スザクを交換するように取引を持ちかけてき

たが、皇族殺しの容疑者を簡単に解放できるわけがない。当然ジェレミア卿は拒否した。
「違うな、間違っているぞ。ジェレミア。犯人はそいつじゃない。クロヴィスを殺したのは……この私だ！」
自らがクロヴィスを殺害したものだと宣言したことにより、民衆がざわめく。
やはり名乗り出たか。しかしこれからどうする？毒ガスは確かに驚異だがそれだけでは交渉材料としては弱い。皇族殺しを自ら名乗るものと容疑者。威力が不確定なもののために逃がすことを良しとするほどブリタニアは甘くないぞ。第一それが本物かどうかもわからない。
ジェレミア卿の合図で取り囲むサザーランドが銃口をゼロに向ける。
「いいのか？公表するぞ、オレンジを」
ゼロの発言に全員が困惑を示す。『オレンジ』……何かの機密情報か？ジェレミア卿の反応から言われた本人にも心当たりは無いように見える。ブラフか？だがあまりにも堂々としすぎている。必ず通用すると確信している。
「私達を全力で見逃せ、そっちの男もだ」
「ふん、わかった。その男をくれてやれ」
「ジェレミア卿！今なんと!?」
「その男をくれてやれ！誰も手を出すな」
「どういうつもりだ!?そんな計画は」
「キューエル卿。これは命令だ」
ジェレミア卿の豹変に思考が追いつかない。ここで皇族殺しを名乗るものと容疑者を逃がすというのか？そんなことをすれば、どんな処罰がまっているか分からない。
枢木スザクの拘束が解かれ、ゼロのもとに歩いて行く。
どうする。ジェレミア卿は正気を失われたのか？このまま黙っていていいのか？ジェレミア卿に全ての責任を負ってもらうか？それだけで済むのか？

俺が迷っている間にゼロと枢木スザクはまんまと逃げおおせた。ジェレミア卿は全力をあげて奴らを見逃せとの命令をだした。
明らかにおかしい。皇族に絶対の忠誠を誓うあの男が、例え自身が破滅するような弱みを握られたとしても、このようなことはしないはずだ。
……催眠術の類いか？強い催眠術にかかると操られているときの記憶がない、とか以前テレビでやっていたが。……ばかばかしい。今はくだらん妄想をしているときでは無い。
……ゼロこのまま逃げ切れると思うなよ。

第六話　ゼロとクレイ

ゼロことルルーシュはいらだっていた。救出した枢木スザクを仲間になるように勧誘したが、自分の行動を否定され、あろうことか死ぬとわかったうえで、軍事法廷に戻るという。

歩き出すスザクの背を見つめながら、どうにかして止める方法がないか、ルルーシュは必死に考える。

「残念だったな。ゼロ。完璧にふられたな」

突然の第三者の声に驚愕する。この場には自分とスザクの二人だけのはず。声からして相手は男だ。しかし聞いたことは無い。

「動くな。こっちを見るなよ。前を向いていろ。なるべくなら生かして捕らえたい。だから無駄なことはするなよ。隣にいるお友達が来る前にお前を殺せるぞ。

枢木スザク。法廷に戻るとは殊勝な心がけだ。俺が捕縛し連行させてもらう。どうせ戻るんだ構わないだろう？」

「ああ、すきにしてくれ」

「ありがとうと言っておこう。外で待っていてくれ。少しゼロと話がしたい」

背後にいる相手を確認しようと振りかえようとしたが先に止められてしまった。自分の方を見させないようにするとはこいつまさかギアスのことを知っているのか？

「誰だ？何時からいた？」

「誰でもいいだろう。お前を捕らえに来たブリタニアの軍人ってことは確かだな。お前が枢木を勧誘している途中からだな」

「どうやってこの場所がわかった？つけてきたのか」

「逃走ルートから場所を割り出した。部外者をつれていきなり本拠地にはいかないだろうからな。近くなく遠すぎない範囲で仲間を待機させておける場所がここだった」

「一人か？」

「ああ。お前のせいで現場は大混乱だからな」

この場所を読み切ったというのか。頭のきれるやつだ。手強いな。

だが一人ならやりようはあるはずだ。
「どうしたゼロ。さっきから意味の無い質問ばかりだな。俺が誰で、いつ来て、どうやって場所を特定したなんてどうでもいいだろう。俺の返答が本当とかも分からないしな。場所の特定は枢木に発信器をつけていただけかもしれないし、外に部隊が待機しているかもしれないぞ」
「っ！」
こいつ俺をからかっているのか。……落ち着け。相手のペースに惑わされるな。
「お前の質問には答えた。今度は俺の質問に答えてもらおうか。クロヴィス殿下を殺したのはお前で間違いないだろうが、新宿でテロリストの指揮をとり、ブリタニア軍に多大な被害を出したのはお前か？」
「そうだ、私だ。相手があまりにも弱くて拍子抜けだったがね」
「その点は同感だ。お前は優秀でうちのお偉いさんは愚かだったな。だが最後はサザーランドに追われ、危うく撃破されるところだったはずだよな。ちなみにあれのパイロットは俺だ。あれはおしかったなぁ」
「っ！……戦術的勝利なんてくれてやるさ。クロヴィスを殺したことで最終的には俺の勝ちだ」
「一人称が私から俺に変わったな。そっちが素かな」
まずい、相手のペースに乗せられている。やはりこいつかなり頭がいいな。会話の中で的確に相手を分析してくる。あとあと面倒になりそうな敵だ。今のうちにギアスを使って殺しておくか。
「戦術的にとはいえ私に泥をつけた男の顔を見ておきたい。振り返ってもいいかな？」
「それは駄目だ」
「なっ!?……なぜだ？」
「ジェレミア・ゴットバルドという男は我が身かわいさで皇族を裏切るような男では無い。だから皇族殺しを宣言するものと容疑者をみすみす逃したりしない。お前が何かしたんじゃないか？

仮に催眠術の類いだとすれば可能性は視覚、聴覚、触覚ってところか。あの時お前はジェレミア卿に触れていないから触覚は排除だ。オレンジという謎のキーワードにより場が混乱しているとき、お前はさらに彼に近づいたな。だから俺は視覚による操作だと仮定した。もっとも催眠療法ぐらいなら認めるが、催眠術に完全に他人を操るレベルの力があるとは思えないが用心にこしたことはない。

だからお前はこの場で気絶させる。安心しろ、後遺症を残さないように相手を気絶させる方法は心得ている」

この男はまずい。ギアスのことを知っているわけでは無いのは確かだろう。だからこそまずい。新宿で俺の場所を見抜く戦略。ＫＭＦの操縦技術。不測の事態に対しての冷静な状況分析。可能性を否定してもなおの用心深さ。

こんな男がいたなんて計算外にも程ある。こっちにはろくな駒がいないというのに。……こいつを取り込むことは可能か？新宿といい、今回といい独断で動いている。手柄をもとめている証拠だ。こいつの目的が分かればあるいわ。

「私と枢木スザクを捕まえればかなりの手柄になるだろう。お前は手柄を欲しているのか？」

「当然だろ。手柄がほしくない軍人なんていないだろう。まぁ、中には変わり者もいるかもしれないが」

「手柄をあげてどうする？軍の将軍にでもなりたいのか？」

「軍での地位を上げるのが目的だが、そこが最終的な目的では無い。あくまで目的達成のための手段だ」

「最終的な目的？なんだそれは。私ならその願い、叶えられるかもしれない」

「なるほど、懐柔しにきたか。……ゼロ。お前は何故戦う。ブリタニアの皇族を手にかけたんだ。ただのテロではない。戦争でもしようとしているようだぞ」

「……戦争か。確かにその通りだ。私はブリタニアに戦争をしかける。そしてブリタニアを倒す！」

「……く、くく。はははは。……ブリタニアを倒すか、大きく出た

な。こんな小さな島国で、そこいらのチンピラテロリストを使っているお前がか？」
「どんな困難なことだろうと、やらなければならないことがある！」
「……どうやら本気のようだな。男の真の決意を笑ったことを謝罪させてくれ。だがお前はここで終わりだ。俺の目的の為にお前を見逃す訳にはいかない」
「まて、まだ俺の質問に答えていないぞ。俺は答えた。今度は貴様の番だ」
「……俺の目的は二つある。一つは俺の父が殺された事件の真相をあばくこと。二つ目は子供の頃に親友と交わした誓いを守ることだ」
男の目的を聞いた瞬間、なぜだがクレイのことを思い出した。
その時、突然瓦礫が崩れ、音が鳴り響く。
「ゼロ！どうかしましたか」
「っち！今回は枢木だけで満足するしかないか。ゼロ！お前は必ず俺が捕まえる」
瓦礫が崩れた方をみると、緑色の長髪が一瞬見えた気がした。

第七話　膝枕と内輪もめ

はぁ……。最高だ。昨夜のオレンジ事件が嘘だったかのように俺の心は穏やかだ。

枢木を連行したことによって、なんとか最悪のケースは逃れた。まさかあいつが証拠不十分で釈放とは驚いた。てっきりゼロはいかれたホラ吹きってことにして、枢木を処罰するのかと思っていたんだが……。

お偉いさんが物申したらしいが、軍事法廷の判決を変えるほどだ。相当な地位の奴だろう。物好きもいたもんだ。

俺にはあの馬鹿は自ら罰を欲しているように感じたんだが。まぁ、いいか。あいつのことなんか考えるだけ無駄だ。

「……おいっ！きいているのか？クレイ」

「……なんですか、ヴィレッタさん。騒々しいですよ。俺は今あなたの暖かくて柔らかい太ももを堪能しているんです。静かにしてください」

そう！俺は今、ヴィレッタさんに膝枕をしてもらってします！枢木スザクの連行のご褒美なんです。暖かい太陽の日差しに、子供達の笑い声。公園の芝生に寝っ転がり、美人の膝枕。最高じゃないですか？

「こんなんことをしている場合じゃないだろ。ジェレミア卿は昨夜の件で信頼を失い。純血派はぼろぼろだ。いつ内部分裂をしてもおかしくない」

そうなんです。ジェレミアさんがピンチなのです。ジェレミア卿も汚名返上、名誉挽回と頑張ってはいるのですが、ぶっちゃけ、もう無駄な気がします。

ここで俺がかんがえないといけないのは、純血のまとめ方ではなく、ジェレミアさんを切り捨てるかどうかだ。現状あの人はもうお仕舞いだろう。なんとか重い処罰は逃れられても、降格は間違いない。

次の総督が甘ちゃんなら、なんとかなったかもしれないがコーネリア様なんだよね。聞いた話だと自分にも他人にもめちゃくちゃ厳しいらしい。お情けは通用しないだろう。二つか三つ降格かな。出世

コースからは完全にリタイヤだ。
　切るのは簡単だけど、できればそうはしたくない。マリアンヌ様と父さんが死んだとき、周りの連中の手のひら返しは、怒りを通りこし呆れるほどだった。ついこの間までごますりにおべっかを使っていたくせに、非難の嵐だった。そんな中ジェレミア卿は変わらずに父さんの死に敬意を表してくれた。俺のことも気にかけてくれた。
　なんとか力になってあげたいんだけど……どうするかなぁ。俺みたいな若造の新兵に何ができるか。
「ヴィレッタさんはこれからどうするの？はっきり言って、純血派はもうお仕舞いだよ」
「まだ決まった訳ではない。と言いたいが難しいだろうな」
「ヴィレッタさんって貴族になりたい口でしょ？純血派は唯の踏み台。没落貴族の俺が言うのもなんだけど、貴族って別に良いものじゃないよ。いつでもどこでも見栄の張り合い。小さい世界での順位づけ。息苦しいだけだよ。」
　……貴族なんて面倒なだけだ。父さんも貴族の規則や慣習なんて息苦しいって、かなり自由にやっていたな。
「ヴィレッタさんは美人でスタイルがいい。おまけに料理上手と完璧だ。男が放っておくわけがない。この機会に軍人なんてやめて普通の幸せを探してみるのも良いと思うよ。地位と名誉がなくても手に入れられる幸せだってある」
「……普通の幸せか。そんな姿は想像できないな」
「できないんじゃなくて、する気がないだけでしょ。まだ若いんだから自分で視野を狭めるなんてもったいないよ」
「年寄りかお前は。……だがそうだな。まだ決めつけるには早いな。そういうお前はどうなんだ？自分の幸せとやらは考えているのか？」
　自分の幸せか。……考えられないな。ルルーシュ様とナナリー様が今もなお、異国の地で苦労していると思うと、自分のことなんて考えられない。
「今の俺に、自分のことを考えている余裕なんてないですよ」
「お父上の事件のことか？私が言うのもおせっかいだとは思うが、も

う忘れることはできないのか?そこまでして突き止めた先に何があるんだ?」
「何があるのか、ですか。……何もないのかもしれません。でもこれだけが、過去だけが俺の生きる支えなんですよ」
俺の時はあの時間から進んでいないのかもしれない。
さてと、休憩は終わり。俺もそろそろ行動を開始しますか。せっかちなキューエルあたりが粛正として、ジェレミア卿の命を狙うはずだ。

キューエルとそのお仲間達はジェレミア卿をゼロ発見と偽り、新宿に誘い込んだ。ジェレミアを討ち身内の恥をすすぐと俺も誘われた。ジェレミア卿はかつてラウンズの候補になったこともあり、かなり強い。五対一で囲んで確実に討つ計画だ。
「ジェレミア。クロヴィス殿下殺害犯を取り逃した責、その身で味わってもらうぞ」
「卑怯なキューエル。ゼロ発見とは偽りか」
「コーネリア殿下着任の前に身内の恥はすすがなければならない。ジェレミア、これが粛正だ。いくぞクレイ卿」
「なっ!クレイ、お前もか」
「まぁ、そういうことなんで大人しくしておいてください。すぐに終わらせますんで」
俺は大型ランスを振りかぶり、投擲する。ランスは背後からジェレミア卿を襲おうとしたサザーランドを深々と貫いた。アクセルを踏み込み、隣のサザーランドにスタントンファを叩き込む。振り返りスラッシュハーケンをもう一機に叩き込み、撃破。
一瞬で三機の味方を潰されたことにキューエルは混乱し、動けなかった。
「ど、どういうつもりだ!?クレイ!貴様、私を裏切ったな!」
「人聞きの悪いことを言わないでほしいですね。先にジェレミア卿を裏切ったのはあなたでしょう。だまし討ちだけでも卑怯だというの

に、五対一なんてただの臆病者だ。あんた達は騎士の恥だ。よって俺があんた達を『粛正』した。大好きだろ、粛正って」
「若造がっ！お前は状況をわかっていない！ジェレミアを殺さなければ我らはお仕舞いだ」
「殺したければ、一騎打ちを申し込むべきだったな。そうすればもう少しお前のことを見直したんだが。どっちにしろお前は組織のトップに立つ器じゃない」
「……俺も殺すのか？」
「あんたを殺すんだったらとっくにやっている。キューエルのことはジェレミア卿にお任せします」
「クレイ、君のおかげで助かった。この恩は必ず返す。さて、キューエル。汝に一騎打ちを申し込む。己が正義をかけ、私と戦え！」
ジェレミア卿とキューエルが武器を構える。両者が動き出したそのとき、両者の間にスラッシュハーケンが打ち込まれる。
「やめてください！ブリタニア軍同士で！」
白いＫＭＦ、特派のランスロット。またしてもお前か、枢木スザク。一度ならず二度までも邪魔しやがって。
「特派が何のようだ。貴様には関係ないことだろうが」
「駄目です。意味のない戦いを見過ごすわけにはいきません」
「意味がない？こちらの事情も知らずに決めつけるな！上からもの言ってんじゃねぇ！」
「仲間同士で殺し合うのなんて間違っています」
「黙れ！お前は昨日もそうだったな。あいつのやり方を全否定した。自分と違う意見は全て否定しやがって。まるで独裁者だな。そんなにお前は偉いのか！」
「違う！間違ったやり方で得たものに価値がないんだ！」
気に入らない、気に入らない。俺とこいつは心底わかり合えない。こいつも同じだ。父さんや俺のことを否定していたやつらと同じだ。お前達に認められるためにやってきたんじゃない。
「ジェレミア卿、ご無事ですか？」
「ヴィレッタか、お前も来てくれたのか、すまん」

「ヴィレッタまで来てしまったか。……仕方がない。できればこれは使いたくなかったが」
キューエルが何かを上空に投げ捨てる。っあれはケイオス爆雷！
「ジェレミア卿！ヴィレッタさん、下がって!!」
敵対したとはいえ味方相手に使う武器じゃないだろうが。気が狂ったか、キューエルめ。だが二人とも十分な距離があるので、あの二人の力量なら軽傷で済むだろう。
「おやめなさーい！」
爆雷が弾けようとした時、一人の女性が走り込んできた。あれはまさかユーフェミア様!?なんでこんなところにユーフェミア様がいる？っ！まずい。このままでは爆雷に巻き込まれるぞ。
俺は横の煙を上げ、立ち尽くしていたサザーランドを盾にして、ユーフェミア様の前に駆け込んだ。ケイオス爆雷が機動し、無数の弾丸を撃ち始める。1，2，3。限界がきたサザーランドを爆発する寸前で投げ捨てる。未だやまない弾丸を自身の機体で防ぐ。ここでユーフェミア様まで万が一があれば極刑もありえる。頼む。持ってくれ！

第八話　コーネリア

目を覚ましたら知らない天井だった。まぁ、おそらく病室だろう。しかもなにやら豪華な個室のようだ。気を失ったようでまるで覚えてはいないが、こんな部屋にいるってことはユーフェミア様は大丈夫だったようだ。

体を起こそうとすると軽い痛みはするが軽症だろう。体を起こしたとき、ちょうどヴィレッタさんが入ってきた。ヴィレッタさんにあの後のことを話してもらった。

ケイオス爆雷をかろうじて防いだが、コックピットで機器が軽く爆発し、軽い火傷と破片による傷などにより気絶してしまったようだ。あの場はユーフェミア様が納めてくれた

らしい。

俺はユーフェミア様のご厚意でこの高級そうな病室を用意してもらえたそうだ。

ユーフェミア様の命を救ったこととして、恩賞を受けられるそうだ。これは俺にとって最高な知らせだ。ユーフェミア様とは幼少期にルルーシュ様関連で多少の縁もあり、ユーフェミア溺愛主義のコーネリア様ならお会いできる可能性もある。

キューエルめ、一時は殺してやろうかと思ったが、結果的には最高になったので見逃してやろう。ジェレミア卿とキューエルは拘束されてしまったようだが、命があるだけ良しとしてもらうほかない。

見舞いの定番と言えばうさぎさんカットのリンゴだ。ユーフェミア様から果物の盛り合わせがお見舞いの品として届いていたので、ヴィレッタさんにお願いした。流石ヴィレッタさん、うさぎさんリンゴも完璧です。

当然食べさせてもらいましたよ。美人に『あーん』をしてもらえるチャンスを逃す俺ではない。顔を赤らめながらやってくれた。なにこの人可愛い。

ヴィレッタさんが仕事のため帰って行ってからしばらくするとユーフェミア様がやってきた。ユーフェミア様が来たので起き上が

ろうとしたが、優しく止められた。
「お体の方は大丈夫ですか？クレイさん」
「はい、おかげさまで痛みもほとんどありません。医者がいうには二、三日で退院できるそうです。それより申し訳ございませんでした。私共のいざこざのせいで御身を危険にさしてしまいました」
「私が勝手にしたことです。あなたが気に病むことではありませんよ。あなたのおかげで傷一つありません。ありがとうございました」
「恐れ多いことです」
「ところでクレイさん。私のことを覚えていますか？子供の頃、ルルーシュやナナリーと一緒に何度か遊んだことがありましたよね？」
「もちろんです。むしろ私のようなもののことを覚えていてもらえて感激しております」
「あの頃は本当に楽しかったですよね」
「……そうですね。私の一番幸せなときでした」
まずい。軽く死にかけて弱っているせいか、あの頃のことを思い出して涙がでてきた。
「この度のお礼として私になにかできることはありませんか？」
「実はユーフェミア様にお願いしたい儀がございます。コーネリア様にお会いすることはできないでしょうか？」
「お姉様に？何故ですか？お姉様になにがご用でもあるんですか？」
「はい。私はマリアンヌ様と父が殺された件の真相が知りたいんです。当時、マリアンヌ様の護衛隊長だったコーネリア様ならなにかご存じではないかと思いまして」
「……そうですか。あなたはいまだにあの事件を調べていたのですね。分かりました。私がお姉様にお願いしてみます」

あれから一週間後、ついに俺はコーネリア様にお会いすることができた。ユーフェミア様とは違い、子供の頃何度かお姿を拝見したことがあるだけで初対面だ。
コーネリア様の横にはダールトン将軍と騎士のギルフォード卿が

控えていた。流石は歴戦の猛者だ。三人とも目の前にたつだけで圧倒される威圧感がある。実力では負けないと密かに思ってはいたが、実戦経験の差は感じざるをえない。
「この度は貴重なお時間を頂き、ありがとうございます。レックス・ロペスの子、クレイ・ロペスと申します」
「よくきたな、クレイ。今回はユーフェミアのことを身を挺して守ってくれたこと感謝する」
「ブリタニア軍に所属するものとして当然のことをしたまでです。それに元はといえば我々のくだらないいざこざが原因であります」
「お父上のことは私も知っている。私の目標としていた立派な騎士であった」
「ギルフォード卿にそう言ってもらえて、息子として誇らしいです」
「この間は純血派のサザーランド三機を瞬殺したらしいな。なかなか腕が立つようだ」
「いえ、一人をだまし討ちししたあげく、五人がかりで討とうとする軟弱どもです。ダールトン将軍が鍛え上げた兵ではこうはいきません」
少しの間談笑をしたあと、例の事件について聞いてみたが、やはりなにも知らないということだった。コーネリア様も独自で調べてみたが結局なにもつかめなかったそうだ。半ば覚悟はしていたが落胆はかくせない。
父のこともあってコーネリア様の軍にこないかと誘われた辞退した。コーネリア様
の軍でもうまくやれる自信はある。親衛隊に入ることも可能だと思っている。だが俺が仕える主はルルーシュ様とナナリー様のみ。それ以外は絶対にありえない。
コーネリア様に会う目標は達成した。事件については何も分からなかったが、いったん諦めるしかないだろう。あとの可能性としてはシュナイゼル様だが、コーネリア様以上に会うことは困難だろう。
次はルルーシュ様とナナリー様の捜索に移ることにした。これ以

上軍にいる必要はなくなったので、その日のうちに除隊申請をしたら、すぐさま受理され翌日除隊できた。コーネリア様かユーフェミア様が気を利かせてくれたのかもしれない。
ユーフェミア様を助けたことによって褒賞として結構な額も頂くことができたのでしばらく金の心配はなくなった。金持ちシスコンに感謝だ。
ジェレミア卿はまだ取調中で会うことはできなかった。ヴィレッタさんにはお礼のプレゼントと共に別れの挨拶をした。
この機会に以前話した、軍を抜ける話をしたがまだやめる気はないらしい。ご武運を。

俺がルルーシュ様とナナリー様を探していることを本国に察知されるわけにはいかない。もし探し当てたとしても、また政治の道具として利用される可能性がある。へたをしたら暗殺される可能性さえある。密かにやらなければならない。
手掛かりがまったくない状況。世界からみれば小さな島国だが、当てもなく探すには広すぎる。だが諦めるわけにはいかない。これだけが俺の生きる支えだ。
日本の偉大な先生も言っていたじゃないか、『最後まで……希望を捨てちゃいかん。あきらめたらそこで試合終了ですよ』と。諦めなければ終わりじゃないんだ。
日本の天才バスケットマンが言っていたじゃないか、『まだあわてるような時間じゃない』と。俺はまだ17だ。まだまだこれからだ。
軍学校の同期だった知り合い以上友達未満のオータク君が教えてくれた名言で自分を鼓舞する。今から新しい一歩を踏み出すんだ。
「ちょっといい加減にしてください！」
……俺の新しい一歩は一歩で終わった。

第九話　運命の出会い・ミレイ

ミレイ・アッシュフォードはルルーシュとナナリーの素性を知る数少ないものの一人だ。アッシュフォード学園理事長の孫娘であり、生徒会会長である。

ただいま今度行われる生徒会企画のイベントに必要なものの買い出し中である。本来なら副会長のルルーシュと一緒にいく予定だったのだが、急な用事で来られなくなったため、一人で来ていた。リヴァルがバイトを休んでついて行くと、言ってきたがバイト先に迷惑なるから断っておいた。

量じたいはたいしたことがないので一人でも問題なかったのだが、買い物を済ませ帰る途中で問題が起きた。ナンパである。

いかにも遊んでいそうな若い男三人に絡まれてしまった。興味がないと何度も断るがしつこい。強引に腕を捕まれる。

「ちょっといい加減にしてください！」

「堅いこと言うなよ。俺達と楽しいことしようぜ。気持ちいいこと教えてあげるからさ」

気持ち悪い言葉に悪寒が走る。なんとか腕を振りほどこうとするが、男と女。力の差でどうしようもできない。周りに人もいるが、期待できないだろう。相手は三人だ。見ず知らずの人を危険を承知で助けてくれる人がどれだけいるだろうか。

「おい、くずども。嫌がっているだろうが。振られたようだから、とっとと手を離して消えろ」

予想していなかった助けに驚く。振りかえると自分と同じくらいの金髪の男性がいた。大柄というわけではないが、鍛えているのが服の上からでもわかる。蒼い瞳は鋭く、男達を威圧している。

「な、なんだよ。お前には関係ないだろうが」

「男が三人がかりで女性にからんだ挙げ句、力尽くとは恥をしれ。確かにこれほどの美人だ。声をかけたくなる気持ちも分かる。一度振られた程度で諦めたくないのもわかる。……だがはっきり拒絶されたのは潔くひくのが男だろうが！」

「さっきから何訳の分からないことほざいていやがる。痛い目みたくなかったらきえな」
「……これだから脳みそがない奴としゃべるのは疲れる。相手の力量もわからんごみが、少し相手をしてやる」
「なっ！三対一でかなうと」
怒鳴っていた男が急に体をくの字に曲げる。腹部を押さえ悶絶している。え、なに？もしかして殴ったの？金髪の方が動いたのは見えたが、あまりにも自然な動きだったので、殴ったことが分からなかった。
「ごちゃごちゃ五月蠅いんだよ、ごみが。そしてお前達はほうけ過ぎだ」
今度は右腕で相手ののどを掴む。捕まれた男の顔が真っ青になっていく。
「それで……まだやるか？」
三人は必死の形相で逃げていった。
「大丈夫でしたか？お怪我はありませんか？」
「ええ、大丈夫です。ありがとうございました」
「いえ。男としてあなたのような美人な女性を助けるのは当然です。それでは俺はこれで失礼します」
軽く会釈をし、振りかえる横顔がどこか悩んでいるようだった。あの顔はよく知っている。自分のそばにいる一つ年下の男の子がたまにする顔だ。困っているのに一人で抱え込んでいる時の顔だ。
ミレイは放っておけず、思わず声をかけた。
「あ、あの。ちょっとまって！助けてもらったお礼にお茶をごちそうしたいんだけど、いいかしら？」
「ありがたいのですが、別に下心があったわけではないので……」
「私がお礼をしたいの。助けてもらって何もしないなんて私が嫌なの。また助けると思って付き合って」
「え、ええ。俺なんかで良ければありがたく」
なかば強引に彼をすいていた喫茶店に連れ込んだ。押しに弱いところもあいつに似ているとミレイは思わず笑ってしまった。

男性の名前はクレイ・ロペスといい。年齢は自分の一つ下だった。軍に所属していたが、つい先程辞めたばかりだという。お節介とは思いつつ、もちまえの面倒見の良さでクレイの悩みの相談にのるつもりでいた。

最初はあまり人に話せないと、難色を示していたがミレイの包容力または勢いによりクレイは少しずつ話し始めた。話すだけでも少しは楽になると。

幼い頃に父親が殺された事件の真相を探ろうと、知っている可能性が高い高位の人物に接触をはかるため、軍で出世しようと努力し、先日接触に成功するもなんの成果も得られなかった。

事件のことは一端あきらめ。親の命で幼い頃、日本にいってしまった親友の兄妹を探すことにしたが、公式には死んだことになっているし、手掛かりも何もないとのことだ。

クレイは酷く思い詰めた表情で話していくうちに、涙を流した。

これには流石のミレイも慌てた。自分を助けてくれた、勇ましい姿はなくなりどうしたら良いのか分からなくなって、泣いている子供にしか見えなかった。

「本当は俺だって分かっているんです。あの方々が生きている可能性なんてほとんどないって。敵国に人質で送られ、すぐに戦争が起きた。とっくに死んだって思うのが当たり前だ。でも俺は諦められない。あの方々に再び会う。それが、それだけが生きぬ希望だった。それを諦めてしまったら俺は……」

最初は警戒し、濁していた部分を口に出してしまっているが、だれが責められようか。必死に押さえてきたものが砕けてしまったのだろう。クレイは涙を流し、肩を振るわせる。

ミレイは少しでもクレイを落ち着かせようと、背中をさすりながら『大丈夫、大丈夫だからね』と声をかけ続ける。

少しでも彼の力になってあげたかった。

さらに詳しく聞くとクレイはぽつり、ぽつりと話し始める。兄の方はクレイと同い年で妹は三つした。妹の方は目が見えず、足も悪く車いすの生活とのことだ。二人の苦労を考えただけで胸が張り裂けそ

うになり、何もできない自分が許せないと。
クレイの話を聞きミレイはあの兄弟のことだとほぼ確信した。だがここで自分が安易に彼らのことを話すことは許されることなのだろうか？
クレイの様子からして演技だとは到底思えない。しかしクレイとの再会がルルーシュ達とって良いことかも判断できなかった。
ミレイはクレイに用事で電話をしてくるから、絶対にここから動かないように言いルルーシュに電話した。
「お願いだからでてよね！」

第十話　選択

ルルーシュは悩んでいた。ブリタニアを相手にするには致命的に人がいない。スザク奪還時に自分を追い詰めた、ブリタニアの軍人はチンピラテロリストと表現した。確かに奴の言う通りだ。

ルルーシュが接触をしているレジスタンスのグループはお世辞にも強いとは言えない。リーダーの扇という男は無能ではないが、多少使えると言ったところだ。彼の良さは個人の能力ではなく、場の調和だと言える。組織のまとめ役としては及第点といえなくもない。

パイロットとしては紅月カレンが優秀だ。彼女はいまだ未熟だが、センスはかなり高いだろう。彼女はこれから必ずエースとして活躍してくれるだろう。

しかしその他は平凡としか言い様がない。現時点であのグループに固執する理由はない。扇とカレンは自分をある程度信用しているが、他のメンバーは自分を疑っている。

やはり必要なものは人材か。せめて一人は自分が本当の意味で信頼、全てを任せられる存在が必要だ。

ルルーシュの携帯が鳴る。電話の相手はミレイだった。買い出しをすっぽかしたことを責められるのか、と出るのを迷ったが、出なかったら直接会ったときの文句が増えるだけだと思い出ることにした。

「もしもし、会長ですか？どうしたんですか？」

「よかった！出た！私さっきね、たちの悪いのに絡まれてね。困っていたらあんたと同い年の男の子に助けられたのよ！」

「それは大変でしたね。それでそれはナンパされたことの自慢ですか？それとも助けた男がイケメンだったとかの話ですか？」

「違うわよ！確かに結構格好良いけど。……って違う！」

会長は普段からテンションが高い目だが、今の会長はいつにもまして高い。興奮というか焦りのような気もする。何があったんだと疑問に思った。

「ねえ、あんたクレイ・ロペスって子知っている？」

予想だにしない一言に言葉が出なかった。何故会長の口からクレイの名前が出てくんだ？

「……なぜ、会長がその名前を知っているんですか？」

「私を助けてくれた子が自分のことをそう言ったのよ。なんでもあんたとナナリーのことをずっと探していたんですって！」

「っ!?……一応確認しますけど、年は俺と同い年。金髪に蒼い目ですか？」

「そうよ！最初なかなか話してくれなかったんだけど、根気強く聞いたら話してくれてね。名前こそ言わなかったけど、どう考えてもあんた達のことだと思ってね。電話したの！」

「そう……ですか。まだそばにいるんですか？」

「勿論いるわよ。ねぇ、どうしたらいい？彼、あんた達のこと話し始めたら泣いちゃって、放っておけないのよ。疲れ切っちゃって、今にも消えちゃいそうで！ねぇ！どうしたら良い？私どうしたら良いの!?」

「落ち着いてください。いきなりのことで俺も戸惑っています。……分かりました。こっちに連れてきてください」

「いいの？もしあんた達の、追手だったりしたら」

「会長はそこにいる『クレイ』が演技をしているように見えるんですか？」

「まさか！あの辛そうな表情は演技なんかでできやしないわ」

「だったらそれが答えですよ。連れてきてください。あとはこちらで対処します」

「分かったわ。三十分ぐらいで着くと思う。生徒会専用のクラブハウスに連れて行くわね」

ミレイとの電話を終えた後も、ルルーシュは信じられなかった。クレイ・ロペス。幼い頃の唯一無二の親友。彼が今もなお、自分たちのことを探していた……。勿論、ルルーシュは彼の性格をよく理解していた。だから彼がかつての約束を守るため、自分たちのことを探していると信じていた。いつか自分たちの元にやってくると。だがこれは自分の願望のようなものだった。

「クレイ・ロペスと名乗る男に本気で会うつもりか？」
「……C．Cか。お前には関係ないことだ」
「関係あるさ。お前には私との契約を果たしてもらうため、死んでもらっては困る。もし偽物でお前の命を狙うものだったらどうするつもりだ？」
「会長の人を見る目は確かだ。本物の可能性は高い」
「仮に本物だったとしても、お前の知っている奴ではなくなっているかもしれないぞ」
「あの男はかわらないさ。誰よりも忠義にあつい男。それが奴だ」
「ふん。ずいぶん奴のことを信頼しているようだな。しかし本人の意思とは関係なく変わってしまうこともある。お前はそれをよく知っているはずだ」
「何？……ギアスか。俺以外にもギアスを使える奴を知っているのか？」
「……逆に絶対にいないとお前は断言できるのか？」
確かにC．Cの言うことはもっともだ。自分と同種の能力者がいれば、相手の性格を変えることなく操ることも可能だろう。だがそれではきりがない。
クレイが自分とナナリーのことを追って日本まで来てくれたことを知ったときは、純粋に嬉しかった。疑うのは簡単だが、あいつのことだけは疑いたくなかった。
「どうしたんだC．C。やけに俺とクレイが会うのを拒むじゃないか」
「私は危険性の話をしているだけだ」
「……もしかしてお前がクレイと会いたくないのか？」
「なにを馬鹿なことを。向こうは私のこと知りもしないんだぞ」
C．Cは顔をしかめ、去って行った。
万が一、クレイが俺の敵になるときは……。

第十一話　再会

クレイはミレイに手を引かれ、アッシュフォード学園にやってきた。はたから見れば年頃の男女が手を繋いで歩いていれば恋人のようにみるものだが、意気消沈した男を半ば強引に引っ張っている様はむしろ姉と弟といった感じだっただろう。

アッシュフォード学園の生徒会専用のクラブハウスにつれられ、一室にてクレイは待たされていた。ミレイは少し用事があるからと出て行ってしまっていた。

軍学校とは違い華やかなアッシュフォード学園にクレイは驚いていた。クレイが通っていた軍学校は機能性重視というか飾りっ気のない場所だった。クレイ自身、己のスキルを高めることしか考えていなかったので、青春とは無縁でもあった。

自分が住んでいる世界とはまるで違う世界のようだった。運命が違っていれば自分もルルーシュとこのような平和な学園生活を送れていたのかもしれないと思い、失笑してしまう。もし、なんてことは考えるだけ無駄なことであり、空しくなるだけだと何度も経験していることだった。

部屋に待たされ十分ほどしたとき、扉が開かる。中には入って来たのは一人の男だった。男を見て、クレイは自分がみている光景を信じられなかった。

子供の頃とは違う成長した姿。しかし面影は確かにあった。自分が思い続けてきた少年が成長し、目の前にいる。

声が出ない。本人かどうか確認しなければならないのに、何度繰り返そうが、のどに張り付き一言も発せられなかった。

「……ル、ルルーシュ様……ですか？」

ようやく震える声でかすかに声が出た。

「ああ、そうだ。俺がルルーシュ・ヴィ・ブリタニアだ。会いたかったよ、クレイ」

クレイはその場に泣き崩れた。涙があふれ出す。次から次へとあふれ出す。言葉にならない叫びを上げながら泣き続けた。いったい

どれ程この瞬間を待ち望んでいたことだろう。
「ル、ルルーシュ様！申し訳ありません！遅くなりました！あなた方をお守りすると誓ったのにお側でお仕えすることもできませんでした」
額を床につけ泣き叫ぶように謝罪する。何度も何度も謝り続ける。
「心のどこかで、もう死んでいるのではないかと、もう会うことなどできない、と何度も諦めかけてしまいました。私は……私は」
「もういい、クレイ。分かっている。分かっているよ。お前のことは俺が誰よりも分かっている。あの状況ならそう思って当たり前だ。だがお前は決して諦めなかった。
その涙が、叫びが……全てを物語っている。だからもう泣くのは辞めてくれ」
「……ルルーシュ様。ナナリー様は？」
「無事だよ。ここで一緒に暮らしている」
「っ！ナナリー様。良かった、良かった……」
ナナリーが生きていることを知ると、一度は止まった涙が再びあふれ出した。
「お前には本当に苦労をかけてしまったようだな。すまなかった」
「私の苦労などお二人に比べれば取るに足らないことです」
「これからは俺とナナリーの側で一緒に暮らそう。そして俺たちのことを守ってくれ」
「イエス、ユア・マジェスティ」

クレイは涙を拭き、改めて忠誠の誓いをたてた。

ナナリーは首をかしげた。最近忙しいらしく、疲れたり怖かったりしていた兄が、夕方に戻ってくると、まるで別人のように明るかった。こんなにも機嫌が良い兄は日本に来てから感じたことはなかった。まるで子供の頃に戻ったようだった。
「今日は俺から……プレゼントがあるんだ」

兄の声が若干震えているように感じられた。すぐに知らない足音が聞こえた。足音からして兄より体格が良さそうだ。男の人？
「ナ、ナナリー様……ナナリー様」
泣きながら自分の名前を呼ぶ声は、知らない男性の声だった。聞いたことがないはずなのに昔から知っているような不思議な感じがした。どこまでも優しく、暖かく包み込んでくれるぬくもりが感じられた。
おぼつかない足取りで自分の元に来て、手を重ねてくる。暖かく大きな手だった。男は手をにぎり泣きじゃくる。
「ナナリー様。良かった。良かった。お会いしたかったです」
「もしかしてクレイさんですか？」
「はい……はい。クレイです。遅くなってしまい申し訳ありません」
ナナリーの目から涙が流れる。
幼いとき、自分と兄のそばにいつもいてくれた。いつも自分たちのことを守ってくれた少年が再び目の前に現れた。ナナリーはクレイの手を握り返した。

二人がようやく落ちつくとルルーシュがあることを提案した。
「ナナリー。お前も知っての通りクレイは真面目だからな。俺達に臣下として仕える気でいる。だけど俺としては昔みたいに友達でいたいんだ。お前はどうしてほしい？」
ナナリーは兄の素敵な提案に迷うことなく、賛成する。
「そういうことだ、クレイ。これからはお前とは主従ではなく友達として接してくれ」
「私からもお願いします、クレイさん」
「……わかりま、分かったよ。お前達がそう望むなら。これからよろしく頼むよ。ルルーシュ、ナナリー」
ルルーシュ、ナナリー、クレイは子供の頃に戻ったように数年ぶり

に心の底から笑った。

日本に来たばかりのころ、ルルーシュがナナリーを背負い、長い階段を上った話をすると、クレイがまた泣き始め、ナナリーが慰める。クレイの涙もろさは子供の頃から変わらないなとルルーシュは思いながら、お茶のおかわりを用意しにキッチンに向かった。キッチンにはC．Cが待ち構えていた。

「ずいぶんと簡単にあいつのことを信じるんだな。本当に大丈夫なのか？かつて二度もお前のことを捕らえようとした男だぞ」

「二度とも俺とは知らずにやったことだ。それも俺達のことを思ってのことだ」

「子供のように泣いたから信じると？」

「覗き見していたのか、悪趣味な魔女め。お前にはあれが演技に見えたのか？俺には分かる。あいつは大丈夫だ。……親友なんだ」

「……泣き虫なところは昔と変わらないな」

ルルーシュが二人の所に戻るとC．Cはそっとつぶやいた。

第十二話　学園生活

ルルーシュとナナリーに再会してから、ミレイさんの計らいでアッシュフォード学園に入学できることになった。もちろんルルーシュと同じクラスだ。住む場所もルルーシュ達と同じ場所に住まわせてもらえることになった。

あなたは神か！

ミレイさんは俺の大恩人だ。命と引き替えにすることはできないが、できる限り彼女の助けはしていきたい。

俺が思うに彼女はルルーシュに恋愛感情を持っていると思われる。応援してあげたいが、家の関係で無理だろう。学生の恋愛程度ならあるいは可能かもしれないがそれも難しいだろう。

アッシュフォード家はルルーシュ達の味方だが、いつ立場を変えるか分からない不安もある。没落した家を再興するためにルルーシュ達を売ることも十分あり得ることだ。

俺の家も父が死んでから落ち目で、今では立派な没落貴族だ。俺には家名はどうでもよかったので、特に気にしていなかった。しかしかつてが華やかだったほど、墜ちていく姿を認められず、過去の栄光が忘れなくなるものだ。

お家再興のため彼女は有力な貴族との結婚が求められるだろう。政略結婚だ。

ルルーシュ達と再会してから数日がたった。学校は楽しいところだった。ルルーシュとは幼馴染みという設定。もちろん俺も貴族としてではなく唯のご近所さんとしてだ。ルルーシュの助けもあって、クラスメイトともうまくやっていけそうだ。

この学校は生徒は全員どこかのクラブに入らなければならないらしく、俺は生徒会に入ることになった。生徒会会長と副会長の推薦となれば反対するものもいなかったらしい。

今までの生徒会のメンバーはミレイ、ルルーシュ、シャーリー、リヴァル、ニーナ、カレンの六人だった。

シャーリーは明るくて優しい。俺のことも気にかけてくれる。ルルーシュのことをルルと愛称で呼んでいる。会って間もないが、彼女がルルーシュのことを好きだというのはわかる。分かりやすすぎる。おそらく気付いていないのはルルーシュ本人だけだろう。あの朴念仁が気付くことはもうしばらくないだろう。

リヴァルは悪友といった感じだ。ルルーシュをよく賭けチェスに誘っているそうだ。息抜き程度なら問題ないだろう。ルルーシュを利用し、稼いでいるのなら容赦しないがそういった感じではない。いい友達だ。こちらはミレイさんに片思い中だ。シャーリーと違って露骨にモーションをかけるが、見事にスルーされている。

リヴァルには悪いが、ミレイの理由と同様にこの恋が叶うことは望み薄だろう。

ニーナは科学オタク、以上。……人見知りの静かな性格ゆえか、微妙に距離がある。こういったタイプはあせらないことが第一だ。

最後にカレン・シュタットフェルト。俺が気になった女性。名家のお嬢様で、病弱でほとんど学校には来ていなかったらしい。

病弱ねぇ……。女性らしく細身だが、貧相なわけではない。スタイルが良いと言う奴だ。体にはしなやかな筋肉がついているし、健康そのものだ。学校でのおしとやかなお嬢様とは別の顔があるような気がする。興味がそそられる。

ルルーシュとナナリーと一緒に暮らせ、楽しい学園生活。こんなにも幸福な時がくるなんて夢にも思えなかった。

「ずいぶんと幸せそうな顔をしているな」

突然女性に声をかけられた。緑色の長髪の美しい若い女性だった。見た目は自分と同じくらいの年齢のようだが、もっと大人のような気がした。初めて会ったはずなのに、昔からの知り合いのようなおかしな気がする。

「昔、何処かで会ったことがありますか？」

「……なんだそれは。ずいぶん使い古された口説き文句だな」

「い、いや。そういったつもりじゃなかったんだけど……」
っ！突然頭に痛みがはしる。なんだ？何かが引っかかる。何か大事なことを忘れているような……。

「クレイ、こんなところで何をしているんだ？」
ふと気づくと、目の前にルルーシュが立っていた。少し考えてしまったようだ。周りを見回してみても先程の女性はいなくなっていた。
俺はさっきの女性のことをルルーシュに聞いてみたところ、ルルーシュの顔が強ばった。何も知らないと俺には言ったが、あの反応は何か知っているようだ。しかし本人が知らないと言うことには詮索するわけにはいかない。何かしら事情があるのだろう。彼女のことは気になるが、焦る必要はないだろう。
しかし先程のあれは何だったのだろうか。そのとき、たまにみる夢を思い出した。
周りは暗く、静かな場所だ。そこで子供の俺が泣いていた。そのそばには誰かいて、慰めてくれている。
はっきりしたことは何もわからない。まるでもやがかかったような曖昧な映像だけだ。

「ああ、そうだな。あいつの若い頃にそっくりだ。流石は親子と言ったところか。あの坊やの忠誠心の高さも父親譲りなんだろう。
何を馬鹿なこと言っているこうなった以上、あいつにも協力してもらうまでだ。
変な勘ぐりはよせ。あの泣き虫にそんな感情など持つはずないだろう。……何年たってもあいつは昔のままだ」
他にもだれもいない部屋でC・Cはまるで誰かと会話しているようだった。

第十三話　初恋

カレンは新しいクラスメイトの男を眺めていた。
クレイ・ロペス。現在自分の周りでもっとも話題になっている男だ。中途半端な時期に転校してきたうえに、もと軍人という異色の経歴をもつ。これだけで十分注目されたが成績優秀、身体能力抜群、人当たりの良い性格。男女ともに人気者である。
おまけに学園で人気を誇るルルーシュとは幼馴染みで親友だという。一部の女性には変な方向で話題になっている。私には興味がない世界だ。
クレイは生徒会にも所属することになり、一緒に仕事をすることもあった。生徒会の仕事もすぐに覚え、即戦力として歓迎されている。
しかしカレンのクレイに対する印象はあまり良くないものだった。
毎日毎日楽しそうに良く笑っている。こんな学校の何処がそんなに楽しいのかカレンには分からなかった。子供のように無邪気に笑うクレイをみて、若干の苛立ちもあった。
ああいう奴には辛いことや、もがき苦しむ経験なんてないんだろう。自分勝手なことわかっていても思わず思ってしまう。
気に入らないことはもう一つある。クレイがたまに自分のことをまるで観察しているような目で見ていることがある。目が合うとにこりと笑い、何事もなかったように流す。実際何もないのだが、あまり気分のいいものではない。特に自分のように隠し事のあるものにとっては。

放課後、偶然クレイと生徒会室で二人っきりになった。
「ねぇ、カレン。前から聞きたいことがあったんだけどいいかな？」
そういいながら彼は私の右手首をつかんだ。いきなりのことで驚く。彼の目は鋭く、息をのむ。
「病弱って嘘だよね。そんな設定にして学校じゃ疲れるでしょ」
突然の言葉にまたしても驚く。私の演技は今まで誰にもばれたことがなったのに。あって数日の奴に見抜かれた!?

「正解みたいだね。俺の父親ってさ、生前は要人警護を仕事にしていたんだ。だから見た目で相手の力量をはかることの重要性と方法を教わっているんだよね。

俺が見るに君は病弱にしては体つきが良すぎる。どうみても健康だし、むしろある程度鍛錬もしている。無駄のないしなやかな筋肉だ。反射神経もかなり良い。いいからこそ普段の動きがぎこちない。わざとらしいとも言える」

「ちょ、ちょっとまって。さっきから何を言っているの？私は嘘なんてついていないわよ」

「最初はただのお嬢様のお遊びかと思ったけど、もっと何かある気がする。なんていうか覚悟をもっている？そんな気がする」

なんなのこいつ。いったい何処まで私のことを感づいているの？ただの当てずっぽう？それにしては的確すぎる。

「ところでなんで俺が君の手首を掴んでいるのかわかっている？」

「え？」

「君の脈を測っている。さっきから脈が速くなっている。焦っている？あと相手の表情を読み取る訓練も受けているんだけど、君は分かりやすくて、可愛いね。さっきまで特に確信してるわけでもなかったんだけ、どうやらあたりっぽいかな」

「ば、馬鹿にしているの!?」

「怒らせてしまったのなら素直に謝るよ。別に怒らせる気はなかった」

クレイは降参とばかりに両手を挙げて後ろに下がる。こいつは危険かもしれない。なんでこんなことをしてきたのかは分からないが、このままではいずれ私がレジスタンスだということもばれてしまうかもしれない。

ここで始末するか？そっとナイフが仕込んであるポーチを手に取る。

「本当にごめんって。唯君のことが気になっただけなんだよ。詮索するつもりはないからさ。その凶器が仕込んであるポーチはしまってくれる？」

「っ！なんで知っているの？」
「そんな怖い顔して取り出したんだ、なにか危ないのが仕込んであると思うのは当たり前だと思うけど」
「……なんなのあなた。私にどうしろっていうの？」
「別に何かしてほしい訳じゃないんだよね。さっきも言ったけど君の隠し事を詮索するつもりはない。でもなぜか君のことが気になったんだ。気がついたら君のことを見ていた。だけどさっき怒った君の顔をみて分かったことがある」
「……なに？」
「どうやら俺は君に〝恋〟しているようだ」
「……は？」
突然の告白に頭が追いつかない。こいつは今なんて言った？私に恋している？あの流れからどうして愛の告白になるのか理解できない。
「ふざけないで！くだらない冗談に付き合うつもりはないわ！」
「ふざけてなんていないさ。俺はいたって真面目だ。俺は君のことが好きだ。今まで余裕がなかったせいかこんな気持ちは初めてで、分からなかったが、今なら自信をもって言える。俺はカレン・シュタットフェルトが好きだ。返事はいつでも良いから、それじゃ俺は失礼するよ」
言いたいことだけを一方的に言って去って行った。
な、なんなのよ、あいつは。真顔で好き、好きって何度も言うんじゃないわよ。
これだからブリタニアは！

第十四話　猫とキス

生徒会室にてミレイさん、リヴァル、ニーナと俺の四人で談笑中である。ただいまの話題は先日行われた俺とルルーシュのチェス対決である。結果は俺の三連敗だった。やはりルルーシュは強い。流石は我らがルルーシュだ。

「しかしクレイがあんなにチェスが強いなんて意外だったな。ルルーシュ相手に互角とは。元軍人ってことで、てっきり肉体派だと思っていたのに以外や以外、切れ者だったとは」

「互角ではないさ、結果は三連敗。完全に負けたよ」

「俺をそこいらの素人と侮るなよ。ルルーシュの対戦は何度も見てきたけど、あそこまであいつを追い詰めたのはお前ぐらいだよ」

「確かにね。結果的には負けちゃったけど、三戦ともどっちが勝ってもおかしくなかったわよ」

「どっちが勝ってもおかしくない勝負を三連勝したからこそ、ルルーシュの方が上だってことですよ。二度までなら偶然もあるけど三度は必然となります」

一見互角に見えたとしてもわずかな差で確実に勝利を得ることができものが真の勝者である。

リヴァルに賭けチェスに誘われた。最近ルルーシュが忙しいとのことで、付き合いが悪いらしい。そこでルルーシュ相手に善戦した俺に白羽の矢がたったわけだ。小遣い稼ぎにはちょうど良いかもしれないが、ナナリーと過ごす時間が削られるのは好ましくない。

最近ルルーシュが忙しく、家に帰るのが遅いことが増えている。咲世子さんや俺がいるから寂しくないとナナリーは言うが、本当は兄のルルーシュにいてほしいはずだ。今度ルルーシュに相談してみるとしよう。何か手伝えることがあるかもしれない。

その後も他愛ない話をしているとナナリーがやってきた。なんでもルルーシュが猫になにか大事なものをとられてしまったようだ。ナナリーが聞いたルルーシュのすっとんきょうな声というのをぜひ

聞いてみたかった。
ナナリーの話を聞き、皆で推測してみる。ラブレター、恥ずかしい写真、ポエム手帳。ルルーシュのポエムか、……気になる！そんなものがもしあるのなら是非見てみたい。俺的はナナリーの写真集を推してみた。あの重度のシスコンなら十分あり得る。そして俺にも見せてくれ！
ミレイさんとリヴァルが顔を見合わせると悪い顔になる。絶対良からぬことを考えているな。
「まっかせてぇ、ぜぇたいルルーシュより先に取り返して見せるから。先に！」
ノリノリでサムズアップするミレイさんであった。

その場の勢いで猫探しに出たのは良いが、どこを探せばいいのやら。目が見えないナナリーの証言なので見た目もわからない。とりあえず木の多い場所にでも行ってみるか。
そのとき校内アナウンスでミレイさんが全校生徒に向けて、猫の捜索を指示した。流石はミレイさんだ。やることがいちいち凄い。しかし見つけた報酬がいただけない。部活の予算を優遇するのは良いだろう。しかし生徒会メンバーからキスのプレゼント。これは断固阻止しなければならない。他のメンバーはどうでもいいがカレンの唇は俺が守る。

それは……なんの前触れもなく突然おきた。
「その猫はこんな風に鳴きます、にゃ～～」
がはっ！ナナリーのあまりにも可愛らしい猫の鳴き声に吐血してしまった。なんて破壊力だ。ナナリー、恐ろしい子。
……しまった！いきなりだったので音声を録音できていない！なんたる失態だ！一生の不覚！ミレイさんならもしかして録音しているかもしれない。あとできいてみるか。

俺がそんな馬鹿なことをやっていると、前方からカレンが走ってきた。あいつ病弱って設定忘れていないか？キスがかかっているから無理もないか。こういうのは男より、女のほうがきついだろう。

「病弱ってことになっているのに走っているのを見られたらまずいんじゃないのか？」

「っ！分かっているわよ。もう病弱なんて設定にしなければ良かった。クレイも猫を探しているの？」

「当然だ。あんな条件だされたら黙っていられないからな」

「あなたもキスが目的なのね。そ、それで誰を指名するつもりなの？……私？」

「指名？キスの権利なんて俺が使うわけがないだろう。確かにカレンとキスはしたいさ。この間の返事もまだもらっていないしな。だがそれはカレンの意志でしてもらわなければ意味がない。強制的にしてもらえても何の意味もない。俺が猫を探す理由はお前が他の奴にキスするのを阻止するためだ。それじゃ俺はもう行くからな！」

猫を探しているとルルーシュに遭遇した。必死になって走っているところみると、かなり大事なものを持って行かれたようだ。カレンのキスを妨害することに夢中ですっかり忘れていた。

上の階から猫の鳴き声が聞こえた。ここの上にいるようだ。そうと分かればこっちのものだ。猫ごときに遅れはとらない。

「待て、クレイ！お前は帰れ！」

「そうはいかない。俺にも譲れないこともある！」

「いいから帰れ！猫は俺が」

「お前に猫を捕まえることは無理だろう。肉体労働は俺に任せてくれ！安心しろ、どんな恥ずかしいものが出てきても笑ったりしないから」

「何をいっているんだ!?まっ、待て！」

ルルーシュの静止を無視して階段を駆け上がる。結構上まで上がるな。逆に好都合だ。ここまで高いと奴も降りられないだろう。袋

のネズミだ。猫だけど。
最上階に追い詰めたと思ったら、窓から外に出ていたようだ。外に出て屋根の上を見ると猫がいた。逆光でよく見えないが、頭が大きい気がする。何か被っているのか？
まぁいい。とにかく捕まえるとしよう。角度がかなり急なため慎重に上っていく。
「クレイ、よせ！」
「大丈夫だ、任せろ。お前には無理だから大人しくそこで待っていろ」
「ぬあっ！」
ルルーシュの慌てた声と下からの悲鳴に慌てて振り向く。ルルーシュが足を滑らして落ちていく姿が見えた。あの馬鹿！運動は苦手なに無理をするからだ。
俺は急いで降りていく。ぎりぎりのところでルルーシュの腕を掴むことに成功せるがかなりまずい状況だ。屋根のふちを掴んでいるが、完全に二人ともぶら下がっている。左腕一本で二人分の体重を耐えている。
この状況ではそう長いこと持ちそうもない。かといって片手で二人を持ち上げるのは無理だ。一人ならどうとでもなるが、ルルーシュを捨てることなんてありえない。
幸い窓はすぐそこだ。勢いをつければルルーシュを窓に放り投げることができるだろう。反動で俺は落ちるが下には植え込みがある。あそこに壁を蹴ってあそこに落ちればなんとかなるはずだ。
迷っていても腕を消耗するだけだ。やるしかない。
「いいか、ルルーシュ、良く聞け。いまからお前を上の窓に放り投げる。あとは自力でなんとかしろ」
「なっ!?」
「反論は聞かん！いくぞ！」
壁に足をかけ、ルルーシュを左右にふって勢いを付けて窓に向かって思いっきり投げ飛ばす。ルルーシュが窓に吸い込まれるのがかろうじてみえた。

あとは壁を思いっきり蹴り上げ、植木の上に落ちる。覚悟はしていたが、かなり痛い。体全身が悲鳴を上げるが、なんとか生きている。

そのあとすぐに救急がきて搬送されたが、奇跡的に打撲や打ち身程度ですんだ。ルルーシュも無事でなんとかなった。

しかしナナリーには泣かれてしまった。申し訳ないことをしてしまった。

結局猫には逃げられてしまって、褒美などは流れてしまった。キスを阻止できたので一応は目的を達成できた。

第十五話　仮面告白大会

本日は生徒会主催によるイベントが行われる。その名も『仮面告白大会』。

最初はルルーシュが提案した仮面〝舞踏会〟が行われる予定だったのだが、ミレイさんがありきたりでつまらないと言いだし、告白大会に変わった。

大会当日に自分の企画が変更されたことを知ったルルーシュが慌てている。自分で立案したっきり、何も準備していなかったことから分かるもんだが……。あいつはたまに抜けているからな。

しかし告白大会か……。仮面をつけることによって、本人の特定を防ぎ、普段人に言えないことを思いっきり叫ぶ、という趣旨のイベントらしい。実際は仮面を付けたところで、声でだいたいの奴は特定されるだろう。はっきり行ってしまえばイベントの勢いでやってしまえ！という感じだ。

流石はミレイさんだ。略してさすミレ。……二度と使うことがない略語ができた。

生徒会メンバーはリヴァルはもちろん、大人しいニーナさえ乗り気でいる。

屋上にトップバッターが現れる。エントリーナンバー、一番『恋する乙女』。水泳帽にゴーグルのした女性。シャーリーだな。姿が見えないと思ったら、やる気満々だな。

『恋する乙女』はルルーシュのことが好きだと大きな声で宣言した。地上にいる生徒から声援があがる。流石はシャーリー。行動力がありすぎる。

だが甘い。それではこの朴念仁には伝わらない。こいつはきっと面と向かって好きと告白してもｌｉｋｅとＬｏｖｅを勘違いすると思われるほどの恋愛音痴だ。なぜあと一歩勇気が出せない。

案の定俺の横で顔が分からなければ返事のしようもない、と言っている。なぜあれが分からない。あれか美少女戦士や魔法少女が顔はそのままなのに、本人特定されないのと同じ原理か？

ゴーグルを何かの暗号と思い、勝手に答えが出ない問題を解こうとする始末。流石はルルーシュ！予想の斜め上を行く！頭は良いけれど馬鹿だな。候補者を４８人まで絞ったところでまたはじめから考え直し始めた。……凄いなこいつ。いったい何人の女生徒を知っているんだ？記憶力抜群だな。無駄遣いだが。

「ルルーー！大好きーー!!!」

ルルーシュをルルって呼ぶのなんて一人しかいないのに、それでも分かってもらえないシューリー。不憫な子。

シャーリー。君の行動力と勇気には敬意を表する。だが甘い。それでは甘い。俺が本当の告白というものを見せてあげよう。

ルルーシュは最初こそ企画が変更されたことに戸惑ったが、今では成功に満足していた。舞踏会が告白大会になったが問題はない。大事なのはみんなが仮面を付けることだ。

あらかじめギアスでゼロの仮面つけるように指示を出していた。これで万が一自分の仮面が見つかったとしても、この時使われたものだと言い逃れができる。

この間は自分のミスのせいでクレイを危険にさらしてしまった。あのような失態は二度とすることはできない。

「エントリーナンバー、二十四番　えっとぉ　クレイ・ロペスさん」

若干困惑した声で呼ばれる名に驚く。あいつさっきから姿が見えないと思ったらあんなところに。

「本名！あいつこの企画の趣旨をわかっていないんじゃない？」

「いや、あいつのことだ、分かった上で目立つつもりだろう。やるからにはとことんやる男だからな」

「まぁ、騎士道ってやつ？」

「クレイ・ロペスは！　カレン・シュタットフェルトを！愛している!!

君の存在に心奪われた男だ!!

この気持ち、まさしく愛だ!!」

声高々に宣言するクレイに生徒達は大歓声をあげる。……やっぱりあいつ馬鹿だな。愛すべき馬鹿と言う奴だろう。

告白されたカレンは会長とリヴァルにはやし立てられ、耳まで真っ赤にしている。

第十六話　C・Cはベッドに横たわっている

生徒会の仕事もなく、日課のトレーニングも終わったので、チェスの相手をしてもらおうとルルーシュの部屋に向かうとちょうどルルーシュが出てきた。

「そんなにでかい鞄をもってどこかに行くのか？」

「ああ、すまない。急ぎの用ができたんだ。ナナリーのことは頼んだぞ」

「それは構わないが……。ルルーシュ、ちょっといいか？」

「なんだ？手短に頼む」

「お前は忙しいようだが何か俺に手伝えることがあったら、いつでも言ってくれ。俺では頼りないのかもしれないが、友として、臣下としてお前のためならなんでもやる。そう……なんでもだ」

「……ああ、わかっている。お前が頼りないなんて思ったことはないさ。お前は俺が知る限り最も頼りになる男だ。だからナナリーのことを任せられる。あいつもお前のことを兄のように慕っている」

「ナナリーのそばについてやれるが、あの子だって本当は兄のような男より、実の兄にそばにいてほしいはずだ。」

「ああ、それも分かっている。だけどこれは俺がやらなければならないことなんだ」

「わかった。何をしているかなんて聞く気はない。だがこれだけは忘れないでくれ。お前とナナリーのためなら俺はどんなことでもする。いつでも頼ってくれ」

「今でも十分助かっているよ。じゃぁ、行ってくる」

ルルーシュはなにか覚悟を決めたような顔をしていた。まるで戦場に向かう兵士のように。あいつが自分から何か言ってくれるまで俺は待つつもりでいる。自分の意志は伝えた後はあいつ次第だ。

「そこにいるのはクレイだろ。ちょっと話がある。中に入ってこい」

特に用もないので校内でも散歩して行こうとしたらルルーシュの

部屋から声をかけられた。この声はC・Cか。いつもルルーシュの部屋に出入りしている謎の女性。一度頭痛がしたことがあったが、あれ以来とくに何もなかった。
　部屋に入るとC・Cはベッドに横たわっている。ここってルルーシュの部屋で、あれはルルーシュのベッドだよな。端から見たら同棲している彼女だな。ルルーシュ本人に確認したところ、全否定していた。
「相変わらずピザばかり食べているようだな。偏食は体に悪いぞ」
「うるさいぞ。坊や」
「呼んだのはそっちだろうが、それで話って？」
「お前は今回のコーネリアの行動をどう思う？」
　予想もしていなかった質問に戸惑う。なぜ彼女がいきなりコーネリアのことを聞いてくる？コーネリアがテロリストが潜伏しているサイタマゲットーに包囲作戦を展開することはニュースでやっていたが、彼女が興味を示すとは予想外だ。世間のことなど興味がないとおもっていた。
「ゼロをおびき寄せるための餌だろうな。新宿と同じ状況を作り、挑戦状をだした。ご丁寧に時間も指定してきている」
「ゼロは現れると思うか？」
「来るな。奴は劇場型だ。こういった大舞台は好みだろう。自分に絶対の自信もある。実際クロヴィスの時は上手くやっていた」
「なら今回もゼロが勝つか？」
「それはまずありえない」
「随分はっきり言うんだな」
　ゼロがクロヴィスでの一件で自信をつけ、同じ要領で勝てると思っているのなら考えが甘すぎる。コーネリアは皇族ではあるが生粋の軍人だ。その周りも歴戦の強者。クロヴィスとは違う。
　戦場はチェスとは違う。チェスでは駒の強さはお互いに同じだ。だからこそ打ち手の力量で全てが決まる。だが実戦はいかに強力な軍を揃えられるかがきもだ。
　コーネリアの軍は経験十分の精鋭揃い。対するゼロは今回も現場

のテロリストを使うつもりだろう。いくらサザーランドを与えても所詮は素人。本職の軍人にかなうはずがない。第一、ゼロの指示にどこまで従うかも怪しい。
おそらく勝負にすらならないだろ。
俺が説明するとC・Cは横になったまま黙ってしまう。彼女がゼロに興味を持つのも意外だった。
「お前はゼロに足りないものは何だと思う？」
「ゼロの知略はかなり優秀だろう。あとはあいつの指揮に応えられる強力な軍。そしてあいつのことを理解し、補佐できる優秀な副官だろう。今のままではとてもブリタニアと戦争なんて無理だ」
あいつは本気でブリタニアに戦争をしかけ、勝つ気でいる。それはこの間のことでよく分かっている。ブリタニア本国を倒してくれるとなれば俺としても喜ばしいことだ。今更あの男がルルーシュとナナリーを手にかけることはないとは思うが、状況によっては何をするかわからない。
ゼロに足りないもの……俺なら。
「お前ならゼロに足りないものを補えるんじゃないか？」
「……言っている意味が分からないな。なぜ俺がゼロに協力する必要がある？」
「お前なら分かっていると思うが、ルルーシュが私を側に置いていることから私はあいつの素性を知っている。もちろんお前との関係も。ゼロがブリタニアを倒すことはお前達にも喜ばしいことだろう」
「それは否定しないが俺がリスクを負う必要はない。俺はルルーシュとナナリーのそばであいつらを守る」
「お前は頭良いし腕も立つ。暗殺者の一人や二人なんなく殺せるだろう。だが相手が組織的に軍で動かれればどうにもできないだろう。ならばゼロと共に強力な軍を作り、ブリタニアを倒すことも選択肢にあっていいだろう」
確かに間違ってはいない。しかし俺のことを買いかぶり過ぎだ。多少知恵が回り、ＫＭＦを上手く操れたとしても、所詮は十七のガキだ。

今の俺は目の前の幸せを守ることで精一杯だ。

第十七話　ホテルジャック

生徒会メンバーによる慰安旅行ということで現在河口湖行きの列車の中だ。参加者はミレイさん、シャーリー、ニーナそして俺の四人だ。

最初ルルーシュ、ナナリー、カレンの三人がそろって不参加だったので、俺も行くつもりはなかったのだが、ミレイさんに男がいた方が色々と安心できるから来てほしいと頼まれてしまった。

ミレイさんにそう言われてしまっては行くしかないだろう。しかし女性の中に男が一人と言うのはあまり良いとは言えない。ハーレムみたいだと喜ぶやつもいるだろうが、実際はいづらいだけだ。せめてもう一人男がいれば良かったのだが。

列車の窓から富士山が見えた。日本が世界に誇っていた立派な山も今ではすっかり悲惨なものになってしまっていた。サクラダイトの埋蔵量が多いとのことで採掘が進んでいる。採掘が始まる前の富士山を見てみたかったな。

河口湖の駅に着くとまずはホテルに荷物を置いていくことになった。俺はともかく女性陣は大荷物ゆえ、持ち歩くのは不便だからだ。

ホテルに着くとすぐに異変に気がつく。日本人が複数いた。いること自体は問題ないのだが、動きからして唯の民間人ではなさそうだ。

周りを気付かれないように注意しながら確認している。なにより目だ。名誉ブリタニア人の多くは敗者の目だが、奴らにはそれがない。

立ち振る舞いからして唯のチンピラテロリストではなさそうだ。おそらく元軍人だろう。噂に聞く日本解放戦線か？

不自然にならないようにミレイの側により、耳打ちする。

「ミレイさん。あまり良くない状況かもしれません」

「え？どうしたの？」

「元軍人と思われるイレブンが複数います。なにか行動を起こすかもしれません。残念ですが逃げた方が良いと思います」

「あなたがそう言うのならそうした方が良さそうね」
ミレイさんは俺のことを信じてくれ、すぐにシャーリーとニーナを側に呼んだ。すぐにこの場を離れると言うと俺とミレイさんの真剣な表情から非常事態だと、二人とも察してくれた。すぐに出入り口に向かうがすでに遅かった。
何台もの車が押し寄せ、中から軍服を着たもの達が雪崩込んできた。この状況で動くのはまずいすぎるので大人しく捕虜になるしかない。
「どうしよう、クレイ」
「今は大人しく相手の指示に従いましょう。大丈夫です。俺が必ず三人共まもってみせます」

人質は全員ホテル一室に集められて見張られている。手足を拘束されていないのがせめてもの救いか。敵のリーダーは草壁中佐といい、日本解放戦線だと言う。
元とはいえ軍人が民間人を捕虜にしてのテロ行為とは落ちたものだな。こんなやり方では民衆の支持は得られないだろうに。そんなことも分からないのか。
まずい状況としか言い様がない。人質になっているのは勿論、相手が悪すぎる。日本解放戦線ではない、コーネリアの方だ。
奴は絶対にテロリストに弱みを見せない。いかなる要求も意味がない。人質など無視して殲滅しにくるだろう。
だがテロが起きて数時間立つが未だにブリタニア軍が動いた雰囲気はない。おかしい。コーネリアの性格からしたらとっくに鎮圧しているだろう。その時は俺達全員こいつらに殺されているだろうから、助かってはいるが。
コーネリアが人質など気にするはずがない。政治や大衆の支持を気にする奴でもない。唯一気にするものと言えば……ユーフェミアか。この人質の中に彼女がいるとしたら納得できる。もしユーフェミアがいるのなら無茶なことはしない。わずかな希望が出てきたか。

「イ、・イレブン」
「今なんと言った!!・我々は日本人だ!!」
緊張に耐え得きれなくなって、ニーナが思わず小さな声でこの場で絶対に言ってはならない禁句を言ってしまった。くそっ！状況的にニーナを責められないが、まずいことをしてくれた。
ミレイさんがニーナを庇うように抱きしる。熱くなる男にミレイさんとシャーリーが訂正するが恐怖と焦りで対応が悪い。頭に血が上っている相手に強く言い返すのは、相手を余計に興奮させるだけだ。
「落ち着いてください。女の子が思わず言ってしまっただけです。許してあげてください」
「なんだ貴様は！・子供がナイト気取りか！」
彼女たちの前に出て謝罪する俺に男は持っていた銃の柄で殴りかかってくる。よけようと思えばよけられるが、受けるしかない。
頭を打たれて膝をつく。頭から血が流れ出てくるのがわかる。覚悟はしていたが痛いものは痛い。
「クレイ！・大丈夫!?」
「大変！・血が出ている！」
「きゃーーー！」
「……っ、大丈夫です。それより落ち着いて。彼らを刺激しないようにしてください」
心配してくれるのは有り難いが騒いで相手を刺激してほしくない。特にニーナ。気持ちは分かるが落ち着いてくれ。いっそのこと気絶させるか？
「生意気なガキが！・そんなにナイトになりたいのならさせてやる。次に飛び降りるのはお前だ！・さぁ立て!!」
男は怒鳴りながら俺の腕を掴もうとしてくる。
限界だな。これ以上待っていても状況が好転するとも思えない、なら自分で切り開くまでだ。
腕を伸ばす男の首を隠し持っていたナイフで切り裂く。立ち上がりながら、何が起きたか分からず膠着している隣の男の股間にナイフ

を突き立てる。ようやく俺が襲いかかったことを理解し、あとのひとりがアサルトライフルを構えるがもう遅い。俺が投げたナイフは男の胸の中心に深々とささった。

人質の中から悲鳴が上がる。勘弁してほしい。これで外に着いている二人が中の異変に気がついて入って来てしまう。急いでドアに駆け寄り入って来た男の顔面に掌底を叩き込む。もう一人が銃口をこちらに向ける。素人が！近接戦闘では銃よりナイフや拳が強いんだよ！男のみぞおちを殴り悶絶しているところに顔面を掴み、思いっきり壁に叩き付ける。

自分の呼吸が五月蠅い。銃を持っている相手を五人もやるには流石に生きた心地がしなかった。ナイフを回収し、掌底で倒した男をつかむ。

「仲間の配置場所と草壁の居場所を教えてもらおうか」

「くたばれ、侵略者どもが！」

「そうか、なら死ね」

俺は男の首を切った。捕虜をとっている余裕はない。

捕虜にされていた人たちを見ると、安堵しているものや、喜んでいるもは勿論いない。俺に対し、恐怖しているものが多い。いきなりこれだけのことをやったのだから当然だ。俺はミレイさん達の方をみることができなかった。

捕虜の中にやはりユーフェミアがいた。二人の護衛も横についていた。

「ユーフェミア様。このようなところで再会するとは。お見苦しいところをお見せしてしまって、申し訳ありません」

「いえ、気にしないでください。それよりこれからどうするつもりですか？」

「こうなってしまった以上しかたがありません。外部との連絡手段を探します。可能なら敵を排除しつつ草壁の首を取ります」

「いけません！あまりに危険な行為です！」

「ご安心ください。自分でいうのもなんですが白兵戦は得意です。幼い頃みた父の勇士は目に焼き付いています。父の名に恥じぬ戦いを

誓います」

ユーフェミアの護衛に銃を渡し、あの部屋を任せた。後は時間との勝負だ。相手がこのことに気がつく前に少しでも敵を排除する。

ホテルの見取り図はあらかじめチェックしてある。非常事態の避難経路の確認は当たり前だろう。

草壁の居場所や敵兵の配置場所はおおよそ推測できる。自分ならどこに配置するかを考えれば良い。

前方に二人組の哨戒を発見。こちらに向かってくるのを角で待ち伏せる。足音からして他にはいない。横に来た瞬間、一人の胸にナイフを突き合って、もう一人の腕を掴み地面に一緒に倒れ込む。落ちるときに相手の喉に肘を叩き込む。

相手は完全に油断している。このホテルを完全に制圧していると。一人ずつ確実に殺していく。

覚悟しろ、誇りを失った敗残兵共。これからお前達を狩るのは、強国ブリタニアで生身での戦闘では最強と言われた男の息子だ。父の名にかけ、貴様らを刈り尽くす。

第十八話　ホテルジャック　その2

ゼロは草壁を値踏みしていた。彼らは自分が組むのに値するのかを。結果から言えば論外だった。民間人を人質にとる愚かな行為から始まり、要求が通らなければ、人質を突き落とす始末。

これでは民衆は納得しない。民衆の支持がない行動はただのテロ。先に続くことはない。民衆が後に続き、進んで協力する組織でなければブリタニア相手に戦争はできない。

ゼロはギアスを使い、草壁達を自害させた。草壁は日本刀で腹を刺したが、部下は拳銃でこめかみを撃った。銃声は当然、外にいる警備にも聞こえる。慌てて中に入ってくるはずだ。

銃をドアに向けて待つがこない。おかしい。自分たちのリーダーがいる部屋で銃声が聞こえれば飛んでくるはずだ。扇達が来るのはまだ先のはず。外でなにかがあったのか？

ゼロが困惑していると、ドアがゆっくりと開かれる。中に入って来たのは二人。一人は日本解放戦線の一員だが異様なことだ。後ろにぴったりとくっついている男に喉にナイフを突きつけられていた。

一目で後ろの男が誰なのか分かったが、混乱もした。ナイフを構えるのは間違いなくクレイだ。だがあいつは人質になっているはずだ。

「これはこれは、予想外の人物がいらっしゃる。お前以外全員死んでいるな。お前がやったのか？」

「いや、中佐達は自決した。行動の無意味さを悟ったのだ」

「……そうか。にわかには信じられないな。こいつらにそんな気概があるとは。まぁいい。ならこいつは用なしだな。他の連中の元にいけ」

クレイはためらいなくナイフを引き、男の首を切った。クレイの体は血だらけだった。焦る気持ちを抑え、至って平穏にクレイに問う。

「どうした、クレイ？何故君がここにいる？確か捕虜になっているのをテレビで確認したはずだが。それにその血はどうした？」

「あ？なんで俺の名前をお前が知っているんだ？あの時は名乗っていなかったはずだが」

自分のうかつさに舌打ちをしたくなった。クレイが血まみれで現れたことに、自分で思っている以上に焦っていたようだ。
「簡単なことだよ。私を二度も追い詰めた男だ。調べるのは当然だろう。対策も必要になる」
「ああ、なるほど。それならもう心配することはない。俺は軍をもう辞めた。お前を追う必要はもう無くなった。それとこの血はほとんど返り血だ。流石に二発、三発ほどくらったが弾は貫通しているし、一応止血もしてあるから大丈夫だろう」
「返り血？君ほどの男なら返り血を極力浴びないようにして殺すはずだ。いったい何人殺したんだ？」
「殺した数をいちいち数えるのは素人か快楽殺人者だ。軍人は目的達成のための排除に気になんかしない」
ゼロ、いやルルーシュは普段とはまるで別人のような表情のクレイに何も言えなかった。普段の明るさはみじんもなくなり、まるで氷のように冷たい表情だった。
「ゼロ、取引といこう」
「取引？」
「そうだ。俺はあんたをこの場で容易に殺せる」
「見逃すかわりに何を要求するのかね？」
「俺の友人三人の身の安全だ。傷一つ付けることなくここから連れ出せ。ああ、当然俺も逃がしてくれ」
「そのようなことなら取引をするまでもない。私は愚かものに鉄槌を下し、人質を全員無事に救う為に来たのだからな」
「なるほど、大衆へのアピールか。馬鹿な連中からブリタニア人の人質を助けるのはいい宣伝になるからな。ならお言葉に甘えるとしよう」
今回の行動の意図を読み切るとは流石だ。クレイ、やはりお前は優秀だな。
予定とは違ったが他のメンバーと合流する。彼らには人質の救出と爆弾の設置を命じておいた。カレンがクレイを見つけて駆け寄る。
「クレイ！どうしたのよ、血だらけじゃない！大丈夫なの？」

「カ、カレン？お前こそなんでテロリストと一緒にいるんだ？」
「そんなのは後よ！それより大丈夫なの？怪我はない？」
「そうだな。今はそれどころじゃないか。怪我はなんとか大丈夫だ。だが疲れた。少し……休ませてくれ」
倒れるクレイをカレンが慌てて抱き留める。どうやら眠ったようだ。
クレイはいくら疲労していても、信用していない相手に命を預けたりしない。カレンが何故テロリストと共にいるのか不明な状況にもかかわらず、彼女を信じ、身をゆだねた。
今はクレイにとって自分はルルーシュではなくゼロ。分かっているが……。ルルーシュはクレイを支えているのが自分ではなく、カレンなのが気に入らなかった。
ルルーシュは誰にも気づかれないように、深く深呼吸し、気持ちを落ち着かせる。扇達の報告で生徒会メンバーをはじめ、人質だったものは全員無事に救出された。人質の中にはやはりユーフェミアがいた。
後は当初の予定通りに決行するだけだ。
『黒の騎士団』の行動開始だ。

第十九話　ブリタニアの黒獅子

コーネリアは河口湖のホテルジャックの報告書に目を通していた。側にはギルフォードとダールトンが控えている。

人質は落とされたものを除いて全員無事に救出されていた。

ゼロが悪質な日本解放戦線を討ち、人質を無事に救出したことをテレビで中継したことによって、ゼロと奴が率いる黒の騎士団はイレブンはもちろん、一部のブリタニア人にまで評価される始末。

これ以上大きくなる前に手を打つ必要があるかもしれないが、最愛の妹を無事に助けてもらった恩もある。今は好きにさせておく。

コーネリアがむしろ注目したのはもう一つの報告だった。ホテルは爆破されたため、詳しいことは分からないが、瓦礫の中から見つかった敵は刺殺、斬殺、撲殺、銃殺、絞殺。ありとあらゆる手口で殺されていた。

確認できただけで二十一人。完全に瓦礫の下敷きになったものも少なくないので本当の数は不明だった。死体を確認したダールトンの話では間違いなくプロの仕業だと言う。急所を的確につき、最も効率の良い殺し方。

問題は誰がやったのかだ。ユーフェミアの証言によるクレイ・ロペスがやった可能性が高い。いや、ほぼ間違いないだろう。これは三人とも同じ意見だった。

軍学校の成績を調べても、奴のＫＭＦの操縦技術も目を見張るものだが、白兵戦のスキルは他を圧倒していた。

流石はレックス卿のご子息だ。この間会ったときはリップサービスも含まれていたが、今は心底そう思った。

レックス・ロペス。普段は温厚で女性と遊んでばかりいる怠け者。だがひとたび戦闘モードに切り替わると、他を寄せ付けない圧倒的な力で相手を蹂躙する。

縛られるのを好まなかった故に、高い役職にはつかなかった。地位にも興味はまるで無かった。命令違反をなんども行ったが、その全てが現場の指揮官がだした指示より優れた結果を出したことにより、不

問とされた。
そんな彼は『ブリタニアの黒獅子』の異名で知られ、敵味方問わず、尊敬され同時に恐れられていた。
なぜ黒かというと、髪は金髪だったが、黒色が好きすぎるあまり、私服はもちろん、軍服、ＫＭＦまで全て黒を愛用していたためだ。
その息子が、父の後を追うように力を付けてきている。あの時、もっと真剣に勧誘しておいた方が良かったか？……いや、無駄だったろう。無理矢理従わせても、気分屋の性格までにていたら役には立たなかっただろう。
警戒しなくてはならないのは、奴が自らが仕える主を得たときだ。奴はただ暴れるだけの猛獣ではない。
仮にレックス卿並の力をつけたクレイが自分たちに牙を剥いたとしたら、生半可なことではすまないだろう。

ホテルジャック事件から一週間たった。目を覚ますと知らない天井だった。という展開をまたするとは思っていなかった。意識を失った俺は病院に運ばれ、五日入院し、この間クラブハウスに帰ってきた。
ナナリーをまた泣かせてしまった。ナナリー、ルルーシュ、咲世子さんには会ったが、他の生徒会メンバーには会っていない。彼女たちの顔が見られなかった。
カレンがなぜゼロ達と一緒にいたのかも気になるが、今は俺自身の気持ちの整理がついていない。
人質達の俺を見るあの目が忘れられなかった。ミレイさん達までにあの目をされるのが怖かった。
人を殺したことは実は初めてだった。あの時はとにかく無心に身体を動かした。自分とミレイさん達を守るために、『敵』を殺していった。
あの時は何も感じなかった。だが時間が立つにつれ、その事実が重

くのしかかる。目を閉じれば俺が殺した人たちが見えるような気がする。
父さんはどうやって耐えていたのだろうか。戦場で数えられない程の敵を殺した後も、父さんはいつも笑っていた。俺の相手をしてくれていた。
父さんのようになりたかった。ただ鍛錬するのではなく常に強い自分をイメージしろと父さんはよく言っていた。俺のイメージしていたものはいつも父さんだった。父さんこそが俺の『最強』だった。
扉がゆっくり開けられる。こんな夜中に誰が来たのかとみると、C．Cだった。
「めずらしいな。あなたが俺のところに来るなんて。夜這いにでも来てくれたのか？」
「くだらないこという元気はあるみたいだな。と言いたいがいつもの切れがないな。適当に言われても女は嬉しくはないぞ」
C．Cは呆れながら俺の横に腰掛ける。そっと俺の頭に手を置いて頭を撫でる。その手は暖かくて優しく、安心する。
「初めて人を殺した気分はどうだ？自分が殺した奴らがみえるか？」
「……なんでわかるんだ？」
「私の知り合いが、昔そんなことを言っていたからな。それはいつまでもお前をむしばんでくるだろう。慣れることはない」
「その人はどうやって耐えていたんだ？」
「あの男は常に自分の戦いに誇りを持っていた。自分が戦うのは守るべき大切なものためだと。自分が敵を殺せば、味方が助かる。その家族を泣かすことがないと。お前も同じだ。常に自分に誇りを持て」
「自分に誇り……」
「今日はもう眠れ」
あの事件以来は初めて安心して眠れた。

第二十話　会長チョ～ップ！

いつも見ている夢と同じようで違う。いつもは遠くからみているが、今は自分が当事者だった。女性の膝にうずくまり泣いている。何がそんなに悲しいのが分からないが泣いている。

女性は優しく、暖かいで頭を撫でてくれる。大丈夫だと、側にいると言ってくれる。悲しくてどうしようもないものが、溶けてなくなっていく。

女性は立ち上がると歩き始める。自分のことをおいてどんどん遠くに行ってしまう。待って、待って！必死に叫ぼうとするが声が出ない。腕を伸ばす。

「待って、おねーちゃん！」

飛び起きるとそこは自分の部屋だった。なんだ？なにかとても大事なことを思い出せそうだった気がしたが、何でも無いような気もする。

頭にもやが、かかったようではっきりしない。

「え、えっと。お姉ちゃんって？」

自分の部屋であるはずのない女性の声に驚いて、声がした方を見るとミレイさんがいた。俺はミレイさんの腕を掴んでいた。慌てて離し、顔を背ける。

なんでミレイさんがこんな朝早くに俺の部屋にいるんだ？それにまだ心の準備ができていなかった。混乱する頭をなんとか落ち着かせようとする。

「会長チョ～ップ！」

「いてっ」

突然後頭部に衝撃がくる。痛くはないが予想していない攻撃に驚く。振り返ればミレイさんの笑顔。

「今ので落ち着いた？」

「……ええ、まぁ」

「……隠し事って好きじゃないから正直に言うわね。この間河口湖

のホテルであなたが人を殺した時ね、怖かったわ。一瞬で何人も殺して、さらに殺し行くと言って出て行った。そのあと周りのは安堵ではなく、おびえた目をしていた。きっと自分もそんな目ををしていたんだと思う。それが分かっていたから、君は私達のほうを見なかったのよね。

ごめんなさい。あなたは私達のことを守るために自分の命を危険にさらしてまで頑張ってくれたのに」

「しかたがありませんよ。ごく普通の女の子がいきなり、テロリストに人質にとられ、目の前で人が殺された。怖がらない方がおかしい」

「それでも私は自分が恥ずかしくなったわ。あなたは私達を守るって約束してくれこと守ってくれたのに。今、ここに来るのも凄く勇気が必要だわ。でも私からいかないと駄目だと思ったの」

ミレイさんは俺の正面にくると、しゃがんで目線を合わせ、手を握る。

「助けてくれてありがとうね」

たった一言。だけどその一言で涙があふれ出てきた。

ミレイさんは俺を抱きしめると背中を軽く叩いてくれた。泣く子供を安心させるように。

「まったく、君は本当に不思議な子ね。強くて格好良いと思ったら泣き虫だし。強くて怖いかと思うと泣き虫だし。……大丈夫。みんなあなたのことをもう怖がっていないわ。みんな感謝している」

その後落ち着いた俺はシャーリーとニーナが待っているところに、ミレイさんに手を引かれながら向かった。初めてここに連れてこられた日のことを思い出し、笑みがこぼれる。

「そういえばさっきお姉ちゃんって言っていたけど、お姉さんがいるの？」

「いえ、俺に兄弟はいません。姉のような人がいた記憶もありませんし。だから子供のころはルルーシュとナナリーがうらやましかったものです」

「ふ～ん。お姉ちゃんがほしいって願望でもあるのかしら？」
「どうですかね？あまり考えたことはありません。年上の女性に甘えたい気持ちはありますが」
「だったらここにいる間、私が君のお姉ちゃんになってあげる！どんどん甘えて、頼ってくれて良いわよ！」
「……え？何を急に言っているんですか？」
「遠慮することはないわよ。なんか君って放っておけないよね。ミレイさんに任せなさい！」
ミレイさんはやたら機嫌が良かった。
シャーリーとニーナにも怖がった謝罪と助けてもらった礼を言ってもらえた。これからまた今まで通り友達のとして仲良くやっていけそうだ。
あとはカレンだ。あの時のことを聞いて良いものかどうか。彼女が秘密にしていることに土足で踏み込むようなことはしたくなった。
俺もルルーシュとナナリーとのことを知られたくないので、気持ちは分かる。彼女が自分から言ってくれるのを待つことにしよう。

俺はナナリーと一緒に夕食を食べていた。部屋に閉じこもっていたせいで知らなかったが、最近ルルーシュが出かける頻度がますます上がってしまったらしい。
ナナリーは自分は大丈夫だというが、寂しがっているのはすぐにわかる。自分のことで精一杯で周りを気にする余裕が無かった。
ナナリーには申し訳ないことをした。こういうときこそ俺がこの子のそばにいてあげなければならないというのに。
ルルーシュを責める気は無いが、確かにきになる。ただの学生が連日夜中まで何をしているの？もう一度さりげなく聞いてみるか。
ナナリーをベッドまで連れて行くと眠るまでそばにいてほしいと頼まれた。俺はもちろん了承する。
「なんなら今日は一緒に寝てあげようか？」

「えっ！……流石にそこまで子供ではありません！からかわないでください」
「ははっ。これは申し訳ございません、お姫様」
ナナリーの手を握り、おやすみと言う。
ルルーシュ。本当ならこれはお前の役目だ。

第二十一話　カレン

ついにカレンから呼び出しを受け、一緒に租界の端まで来ていた。
右を見れば華やかで整備された租界の街並み。
左を見れば無残に破壊され、風雨にさらされるまま瓦礫の山とかしたビル群。
勝者と敗者の境界線。
俺とカレンはゲットーへと足を踏み入れた。
日本はブリタニアに負け、名前を奪われブリタニアの属領『エリア11』となった。光と影。めざましい発展をみせる租界に対して、戦争の爪痕を引きずったまま、放置されるゲットー。
太陽パネルの潤沢なエネルギー、清潔な上下水、世界中から海を越えて集まる物資。全てはブリタニアのため、日本を統治するブリタニアのためだけに全て費やされる。
当然と言えば当然だろう。ブリタニアが欲しかったのは、日本という国ではない。日本独自の文化。民族しての風習。そんなものは必要なかった。欲しかったのは『サクラダイト』だけだ。
富士山。世界屈指のサクラダイト鉱脈。そのための侵攻。そのための占領。そのための支配。そのほかはどうでも良かった。
日本人に残された道はブリタニアの為の労働力だけだった。はっきりいえば命令をきくだけの奴隷だ。
カレンは名誉ブリタニア人制度など、今までに抱え込んだ怒りが爆発したようだった。普段のおしとやかなお嬢様からは決して想像もできない姿だった。
「ごめんなさい。興奮しすぎたみたい。格好悪いところみせちゃったわね」
「気にする必要はないさ。誰にでもそういったときはある。むしろ本当の君を垣間見えたことが嬉しいよ。学校での君も素敵だけど、さっきみたいな君も魅力的だ」
「なっ!?あなたはすぐそうやって！私は真面目な話をしているの！」
「俺だって真面目だよ。好きな人のことをしれたら嬉しいのは当然の

ことだろう？」
「……もういいわ。真面目に相手するのが馬鹿みたい」
カレンはため息をはくと、そっぽを見てしまった。別にからかっているつもりはないのだが。
「それにしても君は日本と日本人にやたら同情的だな。ブリタニア人としては珍しい。その理由がゼロと一緒にいた理由かな？」
「あなたはイレブンではなく、日本人と呼ぶのね」
「俺の場合、相手によるかな。君が日本贔屓だからそう呼んだだけ。俺としては呼び方なんて別に気にしていない。性別、国、人種、宗教。それら全てをいちいち区別するのが面倒なだけだよ。人間は人間。俺にとって大事なのは敵か味方かどうでもいい。これだけだ」
「随分とたんぱくな考え方なのね」
「同じ国の国民同士だって殺しや差別は日常的に行われている。他の国という外部の敵を作る方が馬鹿を誘導できるからそういった仕組みが作られただけだ」

俺の言葉にカレンがどう答えるべきか迷っていると、突如、地面が揺れた。廃墟の向こう、いくつか離れた通りの方で、赤黒い煙が立ち上った。爆発だ。
「我々は黒の騎士団である！」
拡声器を通じたがなりごえが響き渡る。声の主は自分の正義に酔っているとしか思えない、妄言を叫ぶ。
爆煙を割って数機のＫＭＦが姿をみせる。日本解放戦線などの反ブリタニア抵抗組織によく使われる『無頼』と呼ばれる日本の手で改造された機体。
無頼の周囲には武器を携えた人間達もいる。いずれも一般人と見分けがつかない格好をしている。おおかた、やばくなったら民間人に紛れて逃げる考えなのだろう。
くそがっ！お前達が勝手に馬鹿をやって、勝手に死ぬのは好きにすればいい。だが周りの関係ない人間まで巻き込むな。区別がつかなかったら、ブリタニアが攻撃しないとでも思っているのか。皆殺しに

あうだけだ。
黒の騎士団を名乗る男は民衆をあおるように叫び続ける。
連中はブリタニアのパトロール隊を襲撃したようだが、明らかに周囲の住民も巻き込んでいた。爆発で倒壊した廃墟の瓦礫が通りに降り注ぎ、誰彼構わず押しつぶす。
無頼の進行方向にいる住民もお構いなしに跳ね飛ばすのが見えた。
「あんなの、黒の騎士団じゃない！黒の騎士団は弱い者の味方だ！ブリタニア人でも日本人でも、無差別に巻き込んだりしない！絶対にしないっ！」
「同感だな。ゼロは正義の味方として民衆の支持を得ようとしている。こんな愚かなことは絶対にやらないだろう」
「そうよ！大方、黒の騎士団の活躍と名声に便乗したはぐれ者の小組織でしょうね。自分達じゃろくな成果も挙げられなかったような連中よ。単なるテロリストだわ！」
相手がＫＭＦ数機だけあって、警察だけではなく、軍も出てきているようだ。
「怒るのは分かるが、今は逃げることが先決だ」
「そうね。避難しましょう」
ブリタニア軍は周囲など構わずに、テロリスト目掛けて射撃を始めた。テロリストも同様に打ち返している。
迅速に戦力を投入したブリタニア軍の動きによって、テロリスト達は包囲されかかっている。
逃げ惑う住民達がその包囲網から逃れ出ようとしていた。逃げ惑う人々にブリタニア軍は容赦なく銃弾を浴びせる。老若男女構わず、殺されていく。
「そんなっ！なんで!?ひどい！」
「疑わしきは罰せよ。ブリタニアにはテロリストもイレブンも同じなんだよ。早く逃げるぞ、ここは危険だ」
目の前の惨劇に呆然とするカレンの腕を強引に引っ張る。
だが、遅かった。あろうことか、苦し紛れに包囲網から強行突破を図った一機の無頼が俺達の方へ突っ込んで来た。

流れ弾が近くの廃屋を吹き飛ばした。同時に、頭部に被弾した無頼が仰向けに倒れ込んでくる。巨大な背中が俺達に迫る。
俺は咄嗟にカレンを両腕の間に抱きかかえて無頼に背中を向けた。無頼が倒れる衝撃と爆風は俺達を襲う。
「大丈夫!?ねぇ、平気!?怪我はない？」
「……ああ。たいしたことない。ちょっと打っただけだ。それよりお前は大丈夫か？」
「ええ。あなたのおかげで怪我ないわ。もう、無茶して……」
「良かった。お前が無事で。好きな女の子のためなら身体ぐらい、いくらでもはるさ」
「……こんなときに、何いっているのよ」
目の前に転がった無頼に乗り込み、損害を確認する。頭部が損傷している以外はまだ十分に動きそうだ。
「カレン！こいつで脱出を図る。すぐに乗り込め！ハッチが閉まらない。このまま目視操縦でいく。しっかり捕まっていろ！」
「う、うん……」
俺の首に回したカレンの両腕に力がこもる。
ちっ！本来なら大喜びしたいところだが、流石にそんな余裕はない。正常なサザーランドならともかく、世代遅れの故障品。さすがにきついか。
いや、そんなことは関係ない。レックス・ロペスの息子であるこの俺が、惚れた女一人、守ることもできないなんてあるわけがない。
この無頼を追ってきたサザーランドが迫る。手負いの相手にとどめをさそうと、ランスを構え、ただ真っ直ぐに突っ込んでくる。
雑魚が!!例え相手がどんな相手であろうと、どんな状態であろうとも、決して油断するなと教わらなかったのか!!
ランスを左手ではじき、右腕のスタントンファで相手の胸元を叩きつぶす。
今の馬鹿が追撃に出たので、包囲網の一角が崩れた。そこに向かって無頼を進ませる。だが一応は正規軍。すぐに前方にサザーランドが二機立ちふさがった。

「このまま突っ込んで食い破る！しっかり捕まっておけ！」
「む、無茶よ！」
「無茶？……そんな道理、俺の無理でこじ開ける!!」

瓦礫を掴み右の奴に投げつける。まさか瓦礫を投げつけてくるとは思わず、二機の動きが止まる。ペダルを踏み込み、機体が悲鳴を上げるがお構いなしに、突っ込んでいく！
勢いそのままに左腕のスタントンファを右の奴に叩き込む、勢いを殺すことなく、左足を軸にして裏拳を左の奴に叩き込む。
二機とも煙を上げ、沈黙する。
「……す、凄い」
流石に今の動きは機体に無理をさせすぎたみたいだ。機体からアラームが鳴るがもう少しだけ持ってくれ。
前方に新たに三機のサザーランドが集まってきた。この状態で三機を相手にするのは流石に厳しいか。
「カレン。お前は降りて走って逃げろ。俺が囮になる」
「な、何言っているのよ！こんな機体で三機相手に勝てるわけないじゃない！」
「安心しろ、カレン。俺はこんなところでは絶対に死なん！そして真の男はほれた女のためになら不可能を可能にする！」
「っ！だから今はそんな冗談言っている場合じゃ」
「俺はいつだって本気だ！」

敵がこちらに動き始めると、いきなり三機とも爆発した。どうやら後ろから撃たれたようだ。爆炎の背後には数機の無頼がいた。
新手の無頼は、軍とテロリストの両方に攻撃をしかけ、討ち取っていく。同時に逃げ遅れた住民の避難も行っていた。
先程までとまるで違う、統率された動き。さっきのテロリストの無頼ではない。
「黒の騎士団よ！彼らこそ本当の黒の騎士団よ。間違いないわ！」
「ああ。どうやらそのようだな」

カレンが立ち上がり、自分が乗っていることを示す。黒の騎士団のおかげで無事に脱出することができた。
ゲットーと租界の境界近くで無頼を乗り捨て、急いでその場を離れた。そして少し離れた公園でかれんに膝枕してもらって現在休憩中です。
俺って今回かなり頑張ったってことで、だめもとでご褒美としてカレンに膝枕をしてほしいと頼んだら見事成功！頑張った甲斐がありました。

「ねえ、クレイ。あなたさっきは本当に勝てると思ったの？」
「勝つという定義によるが、カレンを逃がして、俺も逃げ切る自信はあった」
「……そう。あなたは強いのね。ナイトメアの操縦だけではなく、心の持ちようも」
「言っただろ。真の男は惚れた女の為になら不可能を可能にすると。これは父からの受け売りだけどな」
「あなたも、あなたのお父さんも素敵ね。今日はありがとうね」
「気にすることはないさ。好きな女の子を守っただけだ。黒の騎士団のことは心配することないぞ。誰にも言う気はないし、詮索する気もない。なに、良い女ってのは秘密の一つや二つあるもんだ」
「ふふ……なによそれ」
「困ったことがあれば言ってくれ。なんでもはできないが、俺にできることなら助けてやれる」
「……そうね。そのときはお願いしようかしら」

第二十二話　ナナリーとの約束

俺は今ナナリーと折り紙で鶴を折っている。折り紙というものをいままでやったことが無かった俺はナナリーに教わりながらやっている。

日本では鶴が千羽集まれば、願いが叶うという考えがあるらしい。みんながナナリーの目と足が良くなるようにと送ってくれたそうだ。

その気持ちが嬉しくて折り紙が大好きになり、咲世子に色々教わっているそうだ。

願掛けを無意味なことだと馬鹿にする者もいるが、俺は良いと思う。何かに頼るのは決して愚かではない。もちろん願いを叶えるための努力をおろそかにしてはならないが。

「それじゃ、俺も鶴を千羽折って、ナナリーにプレゼントするよ」

「私にですか？」

「ああ。ナナリーとルルーシュがずっと二人で幸せに暮らせますようにって」

「ありがとうございます。ですが、それでは不十分です。私とお兄様、そして……クレイさん。三人で一緒に幸せに暮らしましょう」

「……ナナリーは本当に良い子だね。お前の何気ない一言がいつも俺を泣かしてくれる」

「ふふ。クレイさんはいつも大袈裟なんですよ」

優しく微笑むナナリーは、マジ天使！

俺のやる気の炎は燃え上がり三日で完成させた。自分で言うのなんだが、マジ頑張った俺！学校の授業はもちろん生徒会の仕事も多かったが、睡眠時間を削りながらやってやった。

ナナリーは喜んでくれたが、同時に怒られてしまった。無理するなと。体をいたわれと。

ちなみにルルーシュには『相変わらず何でもできるな。だが才能の無駄遣いだ』と若干呆れられた。

褒めているの!?けなしているの!?

それからネットでいろいろな折り方を調べた。目が見えないナナ

リーの為に見た目が細かい細工より、さわって分かりやすい形のものを覚えた。
いくつもの折り方の中でナナリーが一番気に入ったのは『桜』だった。
「……あの、クレイさん。こんな感じで……どうしょう？」
「上手だよ。ナナリーは飲み込みが早いね」
「それはきっと、先生がいいからです。……うふふ」
「急に笑ってどうしたんだい？」
「……あ。すみません。その、楽しくて、嬉しくて……」
「なるほど。折り紙を折るのが楽しいのか。色々覚えたかいがあったよ」
「ちょっと違います。クレイさんと一緒に折り紙をするのが楽しいんです」
ナナリーはほおを染めながら、それでも一生懸命折り紙を折り続けた。
本当にかんべんしてほしい。どうしてそうやってまた俺を泣かすことを言うんだろうか。
「ナナリー様。俺なんかでよろしければ、いつでもお側にいます」
「ありがとうございます。ですが私達はお友達ですよ」
「ああ、そうだったね。ごめん。思わず」
その後も俺とナナリーは一緒に折り紙を折った。今度桜の合作をすることにした。その方が二人で、一緒に折り紙をしている気分になる。
二人でつくる一つの花。それは特別な感じがする。
ルルーシュに見せれば、さぞ悔しそうな顔をするだろう。その時はもっと妹のそばにいてやれと言ってやるさ。

今日はナナリーと咲世子さんに中庭でピクニックに誘われた。足の不自由なナナリーを遠くに連れて行くわけにはいけないからだ。
折り紙のお礼らしい。中庭にシートを敷いて三人で座る。

「クレイさん、不思議です。いつも来ているはずの場所なのに、新鮮な気がします」
「ピクニックだからだろうね」
「それだけでは無いと思います。……クレイさんが一緒だから……」
「そうだったら俺も嬉しいな」
俺は並べられた弁当箱から、ミートボールにフォークをのばした。
「このミートボールは、すごく美味しいな」
「それは咲世子さんの自信作です。咲世子さん、お料理が上手なんです」
その言葉に感謝の意を表すように、咲世子さんはそっと頭をさげた。家事全般をそつなくこなし、目と脚が悪いナナリーの面倒も見る。
咲世子さんはメイドの鑑のようだ。
あと気になるのが、咲世子さんってただの一般人って感じじゃないんだよな。動作の節々に達人のように感じられる時がある。なんらかの体術を納めていると思われる。日本風にいえば忍者のような印象だ。
ルルーシュ達の護衛も兼ねているのだろうか？それなら良いのだが、もし監視者だとしたら面倒な相手だ。やぶ蛇をつつくわけにもいかないので、今は何もしないほうがいいだろう。敵意のようなものは感じたことはないし。
「お嬢様も、お食べになりますか？」
「もちろん、いただきます」
「せっかくですから、私がお嬢様に食べさせてさしあげますね」
咲世子さんは小さめのミートボールをフォークに差すと、僕に向かってフォークの柄を差し出した。
俺に食べさせろってことか!?　ナイスパスだ！咲世子さん。　ここで怖じ気づくなんて男が廃る！　クレイ、いきます！
咲世子さんに招かれ、ナナリーのそばに近づく。
「お嬢様、お口をお開けください」
「はい、あ～ん」

まるで子供のように、ワクワクしながら口を開けるナナリー。か、可愛すぎる！
俺はそっとミートボールを食べさせた。
「……あ、美味しいです」
「ありがとうございます」
咲世子さんはわざと遠くから声をかけた。いつの間にあんなところに！やはりただ者ではないようだ。
「……え？あれ？」
状況を理解しようと、ナナリーが小首を傾ける。　うん、可愛い。
そして次の瞬間、ナナリーの顔が赤く染まった。　うん、可愛い。
「クレイさん、ど、どうして……?!あーんだなんて、はずかしい……」
赤くなったほを隠すように、ナナリーは両手で顔を隠した。　ナナリー、マジ天使！
こうして、ピクニックの楽しい時間は、あっという間に過ぎていった。

俺はナナリーを抱きかかえていた。いわゆるお姫様だっこってやつだ。
俺とナナリーは学園の中で最も高い場所に来ていた。普段は車いすのナナリーは危険だからと、立ち入りを禁止されている場所だ。
咲世子さんに手伝ってもらって誰も気付かれなかった。
「どうだ、ナナリー。風が気持ち良いだろう」
「はい。気持ち良いです。それに空気が違うのも分かります」
「俺がもっと、もっと、お前に今までと違う場所に連れて行ってやる。経験をさせてやる。お前とルルーシュは俺が命に代えても守ってやる。だからお前は目を治すことを諦めるんじゃないぞ。目が治ったらいろんなものをみせてやるからな。
折り紙の桜なんかに満足するなよ。本物の、満開の桜をルルーシュと一緒にみよう」

「はい。私はお兄様とクレイさんのことを信じています。ですから先程の言葉少し訂正してください」
「訂正？」
「命に代えてもなんて言わないでください。ずっと、ずっと私達のそばにいてください」
「……そうだな。俺もお前達とずっと一緒にいたい。それにお前が気に入った男をルルーシュと二人で勝負しなければならないしな。『ナナリーが欲しければ俺達を倒していけ！』って」
「もう、何を言っているんですか⁉お兄様とクレイさんに適う人なんていないですよ」
「それぐらいの気概がなければナナリーを任せられないということさ」

第二十三話　C・Cがシャワールームに入って来た

鍛錬のあと、シャワーを浴びようと自室に戻ると、なぜか俺のベッドの上でピザを食べているC・Cがいた。俺が帰ってきたのをみてもC・Cは軽い挨拶をすませたあと、もくもくとピザを食べ続けた。

「別に良いけど何でいるの？」

「簡単なことだ。ルルーシュに部屋から追い出された。落ち着いて食べられる場所がここしかなかった。それだけだ」

「……あ、そう。どうでもいいけどせめてテーブルで食べてくれ。ベッドは汚すなよ」

「子供じゃないんだ、こぼしたりしないさ」

「大人はそもそもベッドでピザなんて食べないよ。よくもまぁ、そんな毎日毎日ピザばっかり食べて飽きないね」

「ピザが飽きるなんてあるはずないだろう。ピザさえあれば他に何もいらないだろ？」

「それはあんただけだよ。身体作りはバランスの良い食事からだ」

「そんなことばかり言う奴にはピザはやらんぞ。どうしてもと頭を下げるのなら、一枚ぐらいやっても良いと思ったものを」

「もらったら後で何頼まれるか分かったもんじゃないからいらないよ。俺はシャワー浴びてくる」

あの人のピザ好きは相当なものだな。どんなに好きなものでも毎日食べたら嫌になると思うが。だいたいあんなにピザを買われてルルーシュの財布は大丈夫なのだろうか？

手早く衣服を脱ぎ、シャワーへ向かう。そして勢いよくノブをひねり、冷たい水を浴びる。そして手早く身体を洗っていると、不意に声をかけられた。

「おい、話がある」

何の迷いもなくC・Cがシャワールームに入って来た。え、何？痴女？

「……もう少しまってくれてもいいんじゃなか？男のシャワーなんてすぐに終わる」

「……随分たんぱくな対応だな。面白くない」
「慌てるところを想像していたのなら残念だったな。俺は見られて恥ずかしい身体作りなどしていない」
「だからってそんな堂々とするのはどうなんだ？前ぐらい隠せ。お前の粗末なものなど興味ない」
「乱入してきたのはそっちだろうに。すぐに終わるから待っていてくれ」
「私はもう食べ終えた」
「自己中すぎるだろ！……それで、何のようだ？」
「知りたいか？……そうだな、お前に恋い焦がれてやってきた、と言えば信じるか？」
「悪いな俺にはもう心に決めた人がいる。お前の気持ちに応えられない俺を許してくれ」
「なんで私がふられたみたいになるんだ。ひっぱたたくぞ。……まったく、親子そろって同じことをいいよって」
　なんか途中から声が小さくなって聞こえなかったが、理不尽なことを言われたようだ。
　C．Cはあからさまに侮蔑の表情で俺を見ている。黙っていればかなりの美人なので、そんな眼でみられたら俺のなかの何かが目覚めそうでかんべんしてほしい。
「だいたい私がそのつもりで来ていたのなら、服を着ているはずがないだろう。服など、邪魔なだけだからな」
「脱ぐところを見られて興奮する、という特別な性癖をお持ちなのかと」
「よしわかった。やっぱりひっぱたく」
「辞めてくれ。お前みたいな美人に裸のときに叩かれたら何かに目覚めてしまう」
　C．Cの俺を見る目がさらに冷たいものになってしまった。正直悪くない。ご褒美です！
「はぁ、どうしてこんな風になってしまったんだ。昔はこんなのじゃなかったのに。……そう言えばあいつはこんな感じだったな。変な

所まで父親に似てしまったか」
　またしても何か呟いているが、よく聞こえなかった。
　ため息をつきながらC・Cはシャワールームから出て行った。何しにきたのあいつ？
　服を着てから部屋に戻るとC・Cがベッドに寝ながら待っていた。ルルーシュの部屋といい、他人の部屋でかってにしすぎるだろう。
「遅いぞ。お前と違って私は暇ではない。さっさと本題に入るぞ」
　またしても理不尽なことを言われた。もう慣れたけど。
「お前はこれからどうするつもりなんだ？」
「ずいぶんと漠然とした質問だな。どうするとは？」
「このまま楽しい学園生活を楽しむだけか？そのあとはどうするつもりだ？ブリタニアから隠れながら生きていくつもりか？」
「……それはこの間の続きか？黒の騎士団に入ってブリタニアを倒せと」
「選択肢の一つに入れるだけの価値はあると思うが。その気がまるで無いわけではないのだろう？」
　確かに選択肢の一つにはある。ブリタニアを、現皇帝を倒せばルルーシュとナナリーの安全は保証される。少なくとも今よりは確実に。
　コーネリアにでも王位についてもらえば、ユーフェミア関係でルルーシュ達の安全は確立される可能性が高い。
　しかしブリタニア人の俺が黒の騎士団に入れるか、入ったとしても信用されるかは分からない。ゼロは優秀だ。だからこそいいように利用されて終わるか、捨て駒にされる恐れもある。軽はずみな行動はできない。
　第一黒の騎士団に参加したら学園での生活にも支障ができる。ナナリーの相手もできなくなるし、ただでさえ会う機会が減ったルルーシュと会える時間もさらに減ってしまう。
　ルルーシュとナナリーに引き合わせてくれた大恩人のミレイさんの手伝いもできなくなってしまう。
　俺はそこそこ優秀だと自負しているが、万能ではない。自分が守れ

る範囲の人しか守ってやることはできない。
カレンが黒の騎士団に入っているのはほぼ確定だ。カレンをそばで守ってあげたい気持ちも当然ある。
しかし俺の身体は一つだ。同時に別々の場所にいるものを守ってやることなど不可能だ。
俺の考えをC．Cに言うと、C．Cは悲しそうな顔をする。
「やはりお前はそういう奴なんだな。お前のその性格はいずれお前を押しつぶすかもしれないぞ。あまり抱え込むな。お前はなまじ何でもできてしまうから、余計なものまで背負ってしまうんだ。もっと自分をいたわれ。お前は自分が思っている以上に、周りに必要とされる存在だ」
C．Cはそのまま部屋を出て行ってしまった。

第二十四話　お前が導いてやれ

ルルーシュは入団希望者のリストをみて満足だった。黒の騎士団を結成し、正義の味方として活動を続けて間もないが、入団希望者は後を絶たない。それだけ民衆からの支持を得ているということがわかる。

ブリタニアは嫌いだがテロという行為を肯定できない人々にとって、『正義の味方』は人気を得た。『正義の味方』なんてものは大人が日々の生活で、言葉に出してしまえばチープなものだが、抑圧された人々の心を動かす存在として効果抜群だった。

喜びと同時にルルーシュには不満もあった。団員が増えているのは喜ばしいことだが、これはと思う優秀なものがいないことだった。

敗戦国の旧日本の民間人から集めているので当然だが、ＫＭＦの操縦に長けたものや優秀な指揮官もいない。戦闘で期待できるのがカレン一人だというのは心許ない。

軍関係者は日本解放戦線に参加しているだろうから、これからの入団もあまり期待できない。集めたものを鍛えていくしかないが、時間も金もかかる。シンジョクやサイタマの時のように、ただ敵からＫＭＦを奪って与えたら良いと言うわけではない。

早急にシミュレーター機を入手したいが、指導できるものがいないのも問題だ。カレンはちゃんとした指導は受けたことがなく、感覚派のようなので教える方には向いていないだろう。

自分一人で戦場を指揮するのは限界がある。最低でももう一人、有能な指揮官が必要だ。カレンは強いが指揮はできないだろう。

「何を悩む必要がある。お前がもっとも欲しい役割を担える駒ならすぐ側にいるだろうが」

「……Ｃ．Ｃか。お前が言っているのはクレイのことか？」

「当然だろう。あいつは若いが全てのことで優秀だ。おまけに奴はお前に絶対の忠誠を誓っている。裏切ることなどまずない。有能で裏切らない。これ以上無い最高の『駒』ではないか」

「あいつのこと『駒』なんていうな!!あいつは俺にとって最高の……

『親友』なんだ」
ルルーシュは拳を強くテーブルに叩き付け、強く握りしめた。
「あいつのことは俺が誰よりも分かっている。あいつが優秀なのは俺が一番分かっている」
「ならさっさと誘えば良いだろう。お前が誘えば奴が断るはずがない。何度か話をふってみたが奴は黒の騎士団を肯定している。ゼロの正体がお前で、ほれているカレンも参加している。奴にとっても悪い話ではない」
「お前、俺に何も言わずにクレイを誘っていたのか!?」
「当然だろう。私はお前に勝ってもらわなければならない。私との契約を果たすためにも。そのために協力はするさ。奴が参加すれば一気に戦力は増え、その後もやりやすいだろう。何を迷う必要がある？
それにブリタニアが先に奴に交渉してきたらどうする？ゼロを捕らえる、もしくは殺せばルルーシュとナナリーの安全は保証すると」
C・Cの言葉にルルーシュは黙る。C・Cの言っていることは正論だ。クレイが加われば、数ある問題も一気に減らすことができる。だがある思いからルルーシュはクレイを巻き込むことができないでいた。
クレイは今まで自分では想像もできないほどの苦労をしてきたのだろう。自分にはナナリーがいた。ナナリーの存在がどれほど自分を助けてくれたかわからない。
しかしクレイは一人だった。死んだと公表された自分とナナリーを諦めず、ずっと思っていてくれた。
あいつは幸せになって良いんだ。もう休んでも良いんだ。
「お前が考えていることはだいたい分かる。だがこのまま放っておくことが本当に奴のためになるのか？」
「どういうことだ？」
「今までの奴はひたすら暗闇でもがいていただけだ。そこにお前とナナリーという光を見つけた。初恋の相手のカレンに大恩あるミレイ。いくつもの光をようやく見つけられた。

あいつは私が今までにあった奴の中でもまれに見る真面目だ。忠義が服を歩いているような奴だ。受けた恩は必ず返す。
今の奴はようやく見つけたその光に必死に走っている。そこがどんなに険しい道であろうと、自分の身体が傷だらけになろうとお構いなくだ。
このままでは奴は自分で自分を壊すことになる」
「ならばどうしろと言うんだ？」
「……お前が導いてやれ。今の奴は掴んだ幸せを失いたくないともがく暴れ馬だ。お前が手綱をしっかり握って導いてやれ」
確かに……C．Cのいうことはもっともだ。守っていると思い込んでいたが、実際は愚直なまでに真っ直ぐなあいつの思いから逃げていたのかもしれない。
そうか、そうだよな。俺達は子供の頃いつも二人で乗り越えてきた。俺とあいつが力を合わせてれば怖いものはない。
ルルーシュが決意を固めると、C．Cが思い出したように言葉を続けた。
「お前がゼロだと明かすときは先にクレイを拘束でもしておくんだな」
「……は？何を言い出すんだ？そんな必要ないだろ。あいつが俺に襲いかかってくることなどない」
「お前にではない。さっきも言ったがあいつは真面目すぎる。知らなかったとはいえ、お前の作戦を妨害し、銃まで向けた。あの忠義馬鹿がそれを知ったら、『死んでわびる』とか言い出すだろうよ」
確かにクレイなら十分ありえることだった。
先程のことといい。なんだか自分よりクレイのことをわかっているようなC．Cに勝手なことと知りながらも気にくわないルルーシュだった。

第二十五話　騎士と姫

カレンと二人で昼飯を食べに食堂に行くと、相変わらず混ではいたのだが、いつもと雰囲気が違っていた。こちらをちらちら見たり、ひそひそと話すのが若干目障りだった。

俺だけではなくカレンも対象のようだ。俺とカレンが二人で行動することは最近増えてきているので、急にこんな感じになったのが不可解だ。

仮面告白大会の後は騒がれたが、今回はあれとはまた違う感じがする。

「よぉ～う、お二人さーん」

にやついた顔のリヴァルが声をかけてくる。何だその顔は？こいつがこんな顔をしているときはろくでもない。

「ちょっと、お二人さんって……。そういうのはやめてって前にも……」

「なにをおっしゃる、お二人さん。すでにちゃ～んと、しっかり耳に入ってますよぉ！」

「何のことかしら？」

「ほら、こないだのシンジュクゲットーでのテロ騒ぎ。黒の騎士団も現れたってアレだよ」

「あ……」

「不良に追われゲットーに迷い込んだカレンお嬢様！

そして危険を顧みず勇敢に助けにはせ参じた騎士のクレイ！

そこへ現れるイレヴンのテロ組織！

鎮圧に出動したブリタニア軍との戦闘に巻き込まれ絶体絶命の二人！

男は女の守るために身体を張った！

『カレンは俺が守る！』

二人は炎の中を駆け抜けたぁっ！」

大袈裟に身振り手振りで熱く語る、リヴァル。俺とカレンはもちろん、周囲の人間まで黙ってというか、半分呆れながらリヴァルの話を

聞いている。
「……って、そういう話になっているけど？実際はどうなのよ？」
なるほど。あの時のことを誰かに見られていたのか。リヴァル話からすれば正確のことは見ていないが、想像を加えて噂が広がっているようだ。
「大袈裟ね……。噂話は尾ひれが付くものよ」
「でもさぁ、助けたのは事実なんだろ？カレンのような、か弱い女の子が無事に逃げ出せたのがその証拠だし」
「それは……そう、だけど……」
カレンが困った顔でこちらを見てくる。さて、ここはどうした方がいいものか。実際はただ逃げただけではなく、ＫＭＦにのって相手を撃破している。しかしその相手がテロリストではなく、ブリタニア軍なんだよな。非常事態とはいえ、問題になるのも嫌だな。
「学園内、この話でもちきりなんだぜ。カレンお嬢様と、その素敵なナイト様ってね！」
「またもう……。そんな話で喜んで……」
「カレンを狙っていた男子も結構多いんだぜ。でも、愛しのナイト様の登場でガッカリさん、しょんぼり君続出だよ」
「もう……やめてよ……」
「で、本当の所はどうなのよ？どうやって戦闘の中をくぐり抜けることができたわけ？」
リヴァルの矛先がこちらに向いた。ここはどういうのが正解か……。
「なぁ、教えてくれよ。よっぽど機転を利かせたのか、火事場で思わぬ力が出たとか、あるでしょ？そりゃもう、報道クラブあたりが飛びつきそうな美味しいネタが?!」
リヴァルは完全に面白がっているな。
「もういいじゃない。確かに私は彼に助けて貰ったわ。その事実だけで充分じゃない？」
「ありゃ、ご機嫌ななめ？」
「興味本位で騒がれるのは好きじゃないし、周りで人が殺されたのよ。

楽しんで良いことじゃないわ」
「え～、まぁ……、う～ん……。それはそうなんだけど。知りたいんだよなぁ……」
「もういい。その噂はおおむねあっている。実際はカレンの手をとって逃げただけだ。たいしたことはしていない。銃撃戦やＫＭＦの戦闘が行われている中じゃ、なにもできないさ」
「確かにそうだよなぁ……。いや、ＫＭＦまで出てきている銃撃戦でちゃんと動けたのは凄いと思うよ」
目立つこと自体は問題ないが、あくまで一般の学生の範囲内で納めておいた方がいい。何かの間違いでよけいな問題が起きる可能性がある。
俺が外部から注目されたら、最悪ルルーシュとナナリーの側にいられなくなる可能性だってある。
「これだけカレンのナイト様ポジションを確立させているけど、まだ付き合っていないんだろう？カレンをかけて決闘とか申し込まれるかもしれないな」
「くるなら丁重に相手してやるだけさ」
「おお、流石に余裕な反応だな。軽くあしらってやるってか」
「何を言っているんだ。リヴァル。一人目は徹底的に俺に挑んだことを後悔させてやるさ。第二、第三の挑戦者が現れないようにみせしめだ」
獅子はうさぎを狩るのにも全力を尽くす。
唯の学生が俺に勝とうなんて、二度と思えないようにしてやるだけだ。リヴァルの表情が引きつっていたが問題ないだろう。

この間のシンジュクゲットーでの報告のためにカレンがゼロの元にやってきていた。
「シンジュクゲットーでの一件は聞いている。無事で何よりだった」

「はい。実はそのことで報告が」
「聞こう」
「あのときＫＭＦを操縦していたのは私ではなく、クレイ・ロペスです」
「ほう。流石というべきか。たしか故障した無頼で性能が上のサザーランドを三機撃破したらしいな」
「はい。彼の操縦技術はもちろん、突発的におきた戦闘にも冷静に対処するところは、素晴らしかったです」
「確かに君の言う通りだ。……それで？」
「はい。彼を味方にすることが出来れば、有力な戦力になることは間違いありません」
「それは間違いないだろう。しかし彼はブリタニア人だ。我々のことは唯のテロリストだとしか思っていないのではないか？ブリタニアに敵対するか？」
「そこは問題ないと思います。彼は日本人をイレヴンと差別していません。現ブリタニア政権にはあまり良い印象を持っていないようです」
「君と彼は確か同じクラスだったか？君が誘えば彼は誘いに乗ってくると？ただの友達以上の関係のかね？たとえば恋人とか」
「こ、恋人!?待ってください！私達はそんな関係ではありません！……た、確かにあいつの思いは充分伝わってくるし、大事にされているのもわかります。で、でも……恋人っていうのは恥ずかしかったり……」
もしカレンがクレイの一途な思いを利用しようとしているのなら、なんらかの対処をする必要があるとルルーシュは思った。しかし顔を真っ赤にして慌てるカレンに判断が付かなかった。
恋に敏感な女性陣が今のルルーシュを見れば盛大なため息をつき、白い目で見ていただろう。しかし仕方が無い。ルルーシュは色恋沙汰には壊滅的に残念だった。
ミスター朴念仁は伊達ではない。古今東西、もてる主人公はこんなものだ。

第二十六話　黒の騎士団への入団

放課後C・Cに誘われ租界を外れ、ゲットーまでやってきた。デートのお誘いか、といつも通り軽口を叩いてみたが真顔でスルーされてしまった。どうやら今回は真面目な話らしい。

瓦礫の街を進みとある廃屋に入っていくと一人の人物が待っていた。黒い仮面に黒装束。ゼロだ。

やはりC・Cはゼロと繋がりがあったという訳か。何度かゼロや黒の騎士団の話を聞いていたので予想はしていた。しかし彼女とゼロの繋がりがいまいち分からない。ブリタニアを倒すことを彼女も願っている？いつも着ている拘束衣を着ているのが関係しているのか？

「良く着てくれた、クレイ。このような形で呼び出して済まなかった」

「一応確認しておくが本人で間違いないんだろうな？」

「もちろん本人だとも。証明のため私と君の出会いから話そうか？」

「いや、結構。偽物がわざわざ俺に会いたがる理由もないしな」

「くだらない話はいい。さっさと本題に移れ」

「C・C、物事には順序というものがある」

「どうでもいい話などするだけ無駄だ。こうなってしまった以上もう後戻りはできないぞ。潔く話を進めろ」

ゼロはC・Cの言葉で黙ってしまった。今のやり取りから察するにこいつらは対等な関係ということか。

本題というのはおそらく黒の騎士団への勧誘だろう。他者に、特に優秀だと認める者に評価されるのは嬉しいが、安易に黒の騎士団に入団することはできない。

ブリタニア打倒は良いがリスクが高すぎる。今のままではゼロに命を預けられない。

「……もういい、私から話す。クレイ、察しの良いお前のことだ、当然この状況もこれからの話も分かっているだろ。単刀直入に聞く、黒

の騎士団に入団する気はあるか？」
「随分ストレートだな。あんたらしいと言えばそれまでだが」
「悪い話ではないだろう。お前も現ブリタニア政権に倒れて貰った方が都合が良いはずだ。そうすればるる」
C．Cがルルーシュの名前を出そうとした瞬間、俺はナイフを彼女の首に押しつける。
「何のまねだ？女にいきなり刃物を押しつけるとは物騒なやつだ」
「それはこっちの台詞だ。いくらあんたでも、あいつらの敵になるのなら容赦しないぞ」
「……もういい。二人とも落ち着け。クレイ、ナイフを下ろしてくれ」
俺はナイフを下ろして、C．Cから離れた。C．Cは全く気にしていない様子でゼロに再び問いかける。
「いい加減覚悟を決めることだ。こいつの忠誠心は分かっただろう。いや、お前こそが誰よりも理解しているはずだ」
「……ああ、分かっているとも。クレイ、私の正体を君に明かそう」
ゼロは仮面に手を伸ばす。仮面がゆっくりと外される。仮面の下から出てきた顔は俺の親友であるルルーシュだった。
ゼロの正体がルルーシュだという可能性は決して低くないと思っていた。しかし実際に正体が分かると戸惑いはする。
「あまり驚いている様子はみえないな、分かっていたのか？」
「いや、可能性としてはあったが、確信していたわけじゃ無かったよ」
ゼロの正体がルルーシュだと思った要素はいくつかある。
ゼロが現れた時期とルルーシュが忙しくなった時期が同じだったこと。しかも誰もルルーシュが何をしているのか分からなかった。
シンジュクゲットーでみせた知略の高さ。こった演出を好む劇場型。おまけに自信家。
最も大きいのはクロヴィスを殺し、コーネリアを狙ったことだ。あきらかに皇族を狙い撃ちしていた。
「クレイ、俺はブリタニアを、皇帝を倒す。そして俺とナナリーが自由に暮らせる世界を作りたい。そのためにお前の力を貸してくれ」

ルルーシュは力強い真っ直ぐな眼だった。俺は差し出された右手を握る。そこに一瞬の迷いもなかった。あるはずがない。
「当たり前だ。俺はお前とナナリーのためなら何でもやる。お前の望みは俺が叶えてやる。何でも言ってくれ。お前とナナリーの為に俺が培ってきた全てを捧げる」
「ありがとう。お前が側にいてくれればこれほど頼もしいことはない」
「お前の信頼には結果で示すさ。子供の頃の約束、覚えているか？」
「当然だ。俺が最高の皇帝になり」
「俺が最強の騎士になる。そして俺達が手を組めば」
「「不可能はない」」

ルルーシュとクレイはまるで子供の頃に戻ったように無邪気に笑った。
C．Cはそんな二人を少し離れたところで優しく、そしてどこか悲しそうに見守っていた。

第二十七話　猫コスプレ

「黒の騎士団！」

教師が授業を進めていると、カレンが突然大声で叫んだ。突然の奇行にクラスがあっけにとられた後、笑い声が響く。

寝ぼけて状況を理解できていなかったカレンだが、意識がはっきりすると自分のしたことが恥ずかしくなり顔を赤らめた。教師から軽く注意される。

放課後生徒会の仕事するために生徒会室に向かうが、疲れと寝不足によりあくびが止まらない。全身は疲れ果て早く布団に入ってたっぷりと寝たかった。

しかしここ数日生徒会の仕事をさぼっていたので流石に今日はでないとまずいと判断し、体に鞭を打ち生徒会室に向かう。

カレンがこれ程までに疲れている理由は黒の騎士団の活動が原因だった。河口湖の事件で黒の騎士団を世間に宣言し、活動はどんどん活気を帯びていく。

昼間は学生、夜は黒の騎士団の二重生活は体力に自信のあるカレンをもってしても辛くないはずがなかった。

「ほら、クレイ。そっち、そっち！」

「馬鹿！やめろ、クレイ！」

壁に手をつき本日何度目かのあくびをしていると生徒会室からミレイとルルーシュの声が聞こえてきた。

楽しそうなミレイと焦っているルルーシュの声に疑問を覚えながら生徒会室に入っていく。

「やめろ！やめるんだ!!」

「すまないな、ルルーシュ。会長命令なんだ」

「顔が笑っているだろう。おい！」

「動かないの！」

中に入るとルルーシュが椅子に縛られ、その周りにクレイ、シャーリー、リヴァルの三人が囲んでいた。それを楽しそうに眺めるミレイとパソコンに向かうニーナ。いつもの生徒会のメンバーだった。

普段と違うのはルルーシュを除く全員が猫のコスプレをしていることだ。ルルーシュが仮装されそうになるのを抵抗しているのはなんとか分かるが、カレンは状況がいまいちわからず困惑する。
ミレイがカレンに気付き軽く挨拶をしたのちこの状況を聞くと、リヴァルが猫のアーサーの歓迎会だと教えてくれる。
シャーリーがカレンの分も用意していてどれにするか聞いてくる。カレンとしては猫のコスプレなんて恥ずかしくて出来れば避けたかった。
「カレンはいらないだろう？」
「え？」
「とっくに被っているもんな」
どうやって断ろうかと考えているとルルーシュが皮肉を込めて言う。ルルーシュの言葉に腹を立てるが、ここで口論するのは学校でのイメージが崩れるのでぐっと我慢する。
カレンは助けを求めようとクレイをみる。カレンからの意図をさっするがクレイはミレイの全身を上から下へと眺めた後、カレンを同じようにみる。
「ふむ。会長、この姿は他の生徒達には？」
「勿論見せないわよ。私達だけで楽しみましょう」
ミレイとクレイは二人そろって満面の笑みでサムズアップする。クレイとしてはカレンのコスプレは当然見たいが、他の男達は見せたくないという気持ちだ。しかしルルーシュとリヴァルなら妥協できると判断した。
カレンは唯一の逃げ道だと思ったものが実は困難茨の道だと理解し、大人しく流れに身を任せる。せめて露出が少ないのを選ぶことにした。

第二十八話　リフレイン

日本人とのハーフであるカレンとは違い生粋のブリタニアである俺を黒の騎士団のメンバーが受け入れてくれるか心配だった。しかしゼロとカレンの推薦、河口湖やこの間の事件で俺の力を知っていたので、思っていたよりすんなり受け入れられた。

今晩、俺が黒の騎士団としての初めての活動だ。リフレインの大きな取引が行われる情報を手に入れたので、取引現場を強襲しさらなる蔓延を阻止することになった。

〝リフレイン〟それはゲットーを中心に蔓延する『幸福だった過去にトリップできる』薬物なのだという。今の日本人には、なんともぴったりな逃避手段ではある。しかしこれで誰かが救われることは無い。むしろ逆だ。

薬を使って今の辛い現実から逃げている人達のことを弱い奴らだと非難することは俺には出来なかった。もし俺が出会ったのがミレイさんではなく、薬の売人だったら俺はこの誘惑に勝てていたのか自信が無かったからだ。

とある租界の倉庫街にて、リフレインの取引が行われる倉庫の外で警備をしているものたちがいた。非合法な薬を取引しているというのに、警備のものたちは欠伸をするものがいるほど、ゆるんでいた。とある理由によりここが襲われることなどないと思っていたからだ。

万が一襲われたとしても、ここの倉庫は特別製でナイトメアの銃器でも突破できない素材でできている。シャッターを開けるのは班長がもつカードキーと毎日変わる暗証番号を入力する必要がある。暗証番号も勿論班長のみが教えられる。

大きな欠伸とともに体をのばすと横でなにやら物音がした気がした。横をみると共に警備をしていた男があり得ない角度に首を曲げて倒れていた。

男が叫ぶより早く、何者かに背後から襲われ口を押さえられ、拘束されてしまった。
「騒ぐな。暴れたらお前も殺すぞ」
耳元で聞こえる声に男は恐怖した。決して脅しでは無い。その声にはいっさいの感情が感じられなかった。なんのためらいも無く自分も目の前で死んでいる男のように殺されるだろう。
恐怖で体が震えていると目の前に仮面を付けた人間が現れた。ゼロだ。今世間で話題のゼロが目の前に現れた。
「お前のもっているカードキーと本日の暗証番号を教えて貰おうか」

倉庫内で十数人の男達が作業しているとシャッターが開き始めた。運搬のトラックが来る時間にしては早すぎる。疑問に思いつつ、ここが襲われることなどないと思っている男達は特に慌てていなかった。
シャッターが十分開いたとき、二機の無頼が突入してきてマシンガンを撃つ。ナイトメア相手に人間が撃つマシンガンで歯が立つはずも無く、大混乱になる。すぐに他の黒の騎士団も突入し、すぐに鎮圧された。
奥へ突入したカレンの無頼が動きを止める。その周囲に人影が見えた。どうやらその部屋に人達は、リフレインで幻覚状態にある中毒者のようだった。
ふらふらとカレンの無頼の前に女性が立つ。カレンはその女性に注意を奪われているようだった。女性が倒れそうになると、カレンが慌てて手を伸ばし女性を受け止める。
「カレン、どうかしたのか？」
「・・・お母さんなの」
「お前の母親か。・・・っ！カレン！どけ！」
突然クレイはカレンの無頼を押しのけ、マシンガンを撃つ。その先には腕を撃たれ煙を上げている一体のナイトメアがいた。警察仕様機のナイトポリスだった。
売人達の油断はこれが理由だった。売人達と警察は手を結んでい

たのだった。
クレイに撃たれたナイトポリスは奥に逃げていき、クレイが後を追う。逃げた先にもう一機待ち構えていた。しかし戦場にでたこともなく、素人のテロリストぐらいしか相手にしたことが無い警察ではクレイの相手になるわけでも無くすぐに二機とも大破させられた。
「クレイ!もう一機こちらにいた。カレンが危ない、すぐに来てくれ!」
ゼロからの無線で無頼を走らせるとカレンが乗る無頼に敵がナイフを突き立てようとしていた。
銃器により敵を爆破させてしまうと、無頼に乗っているカレンは大丈夫だが、そばにいる彼女の母親が危ない。クレイはマシンガンでナイフをピンポイントで打ち落とす。敵がクレイに注意を向けるが動きが遅い。敵に接近し抱え込みその場から離れてから、投げ飛ばしコックピットを破壊する。
「俺の惚れた女に何しやがる」
クレイのこの日一番の怒りがこもった言葉だった。

扇達がゼロをおいてカレンの元に駆けつけようとしたとき、もう一機別のナイトポリスが扇達に照準を合わせていることにクレイは気がついた。クレイはその時にやりと笑った。

扇達が敵の存在に気がついたときはもう遅かった。照準は自分たちに向けられて死を覚悟した。敵のマシンガンが発射されたその瞬間。
「扇さん!危ない!」
クレイの乗る無頼が扇達の間に割り込み、銃弾をあびながら撃ち返す。ただ撃つ相手と違いクレイの照準は的確で、相手の方が先に爆破した。しかしクレイの無頼も損傷が酷くまともに動く状態では無かった。壊れた無頼からクレイが這い出てくる。
「扇さん、皆さん。ご無事でしたか?」
「ああ。君のおかげで命拾いした」

扇をはじめ、皆がクレイに感謝の言葉をかける。
「俺達のせいでお前の無頼を駄目にしてすまなかったな」
「何を言っているんですか、玉城さん。無頼の換えはそのうち見つかりますけど貴方たちは死んだらかえはききません。皆さんの命を救えるのなら自分の機体なんておしくないです」

押収したリフレインを全て焼き払い、撤収作業をしているなか、クレイは人気の無い暗がりでとある人物会っていた。
「誰かに見られていると思ったらあんただったか、C．C」
「ほう、私の気配に気がつくとは流石だな」
「気配を消す、察知するは方法、重要性は父親に教わっていたからね。そっちこそ一流の暗殺者なみだったぞ。どこで身につけたんだ？」
「なに昔お節介な男が無理矢理教えてきただけだ。それより随分上手くやったじゃないか。感心したぞ」
「・・・なんのことかな？」
「とぼけるなよ。お前なら扇達のことも余裕をもって助けられたはずだ。わざとああしたな」
「人間ってやつは知らないうちに助けられるより、命の危機を感じだときに助けられた方が相手に対する感謝が上がるもんだ。無頼なんておもちゃで団員の信頼が買えるなら安いもんだ。ゼロが顔を出せない謎の人物だから、俺があいつらの信頼を得ていた方がいいからな」
「悪い顔だ。とても仲間の信頼を得るって顔じゃないぞ」

第二十九話　幸せな時間

久しぶりに俺はルルーシュとナナリーの三人で集まっていた。テーブルの上には折り紙でおった様々な作品が並んでいた。

自分でいうのも何だが俺は手先が結構器用なほうだ。俺はネットでナナリーの為に調べた折り紙をつくるが、目の見えないナナリーの為にあまり複雑では無く、さわって形が分かりやすいものを選んだ。

ナナリーの手を取りながら教えている。ナナリーも目が見えないわりに器用で、今では鶴も一人で折れるようになっていた。

しかしテーブルの上には不格好なものもあった。俺でもナナリーのでもないとなる当然選択肢は一人だ。そうルルーシュだ。

身体能力以外は割とそつなくこなす男だが、以外と折り紙は苦手なようだった。ルルーシュが自分でつくったものを俺やナナリーとの比べて難しい顔をしている。

俺はルルーシュの肩をそっと叩き、優しく笑いかける。その時のルルーシュのなんとも得ない顔は最高だった。写真に撮ってミレイさんにでもみせれば大爆笑していただろう。

ふと気がつくとルルーシュとナナリーがこちらを見つめていた。

「あのぅ・・・リヴァルさんとお兄様のこと何か聞いていませんか？」

「なんの話だい？」

「カレンさんから聞いたのですが・・・。何故かリヴァルさんが、お兄様のズボンを持って走っていたそうなんです。でも、お兄様は教えてくれないし、リヴァルさんはいないし。リヴァルさんは何をしたかったんでしょうか？」

・・・何それ面白そう。俺も是非見たかった。

俺はリヴァルがルルーシュのズボンを持って走っていた理由を想像することにした。

「・・・それはだな」

ルルーシュが『何も言うな』とばかりににらむが、俺はナナリーの希望を優先させる。当然だよな。可愛い女の子の要望に応えるのが紳士のたしなみだ。

「ただのいたずらだろう」
「リヴァルさんに、ですか？」
「もちろん実行したのはリヴァルだ。しかし裏で操っていた者がいたと思われる」
「操っていたもの、ですか？」
「そうだ。ほぼ間違いなくミレイさんだろう。彼女から直接指示された、もしくはミレイさんの気をひこうと自分で買ってでたかもしれない。・・・どうだ？ルルーシュ」
「流石にたいした推理力だ。その通りだ。なんでも俺に体操服で授業を受けさせるためだったらしい。まったく、会長の悪ふざけには、いつも振り回されっぱなしだよ」
「でもどうして体操服なんですか？意味がよく分からないのですが・・・」
「俺もだよ。たぶん、体操服デーの実施とか考えているんじゃないか」
「それはありそうですね。ミレイさんはそういう遊びが好きですから」
・・・流石がはミレイさんだ。さすミレだ。学生時代にしか出来ない悪ふざけ、これは俺も乗るしか無い。ミレイさんには何かとお世話になっているし、こういったところで恩を返していかないと。そう、恩を返すためだ。決してミレイさんに振り回されて困っているルルーシュを笑いたい・・・、いやみたいわけではない。断じてな。
「なるほど、よく分かった。俺の方からもミレイさんに一言言っておこう」
「・・・まで。何を言うつもりだ？」
「・・・質問の意味が分からないな」
「とぼけるな。お前のことだ。どうせ面白そうだと思って、会長に協力を志願するつもりだろう」
「ところでナナリー。ミレイさんの考えた面白企画をもっと教えてくれないか？」
「おい、話を変えるな。まだ終わっていないぞ」

こうして俺はルルーシュとナナリーからミレイさんの武勇伝を色々と聞かせてもらった。ミレイさんの企画力と行動力はただただ感心する。本当にあの人は面白い人だ。

二人が楽しそうに話をする姿をみて、こちらも嬉しくなってくる。

「どうした?クレイ。やけに楽しそうだな」

「いや、・・・お前達が幸せそうで本当に良かったと思ってな。同時にその時間を共有できなかったのが寂しくもある」

「これからはクレイさんもずっと一緒です。一緒に楽しい思い出をつくっていきましょうね」

俺の手を優しく握りながら、ナナリーが微笑んでくれる。ルルーシュも笑いながら頷く。

俺は目頭が熱くなる。

「そうだな。・・・その通りだ。そうとなればミレイさんに体育祭デー実施の提案をしなくては!あと噂の男女逆転祭りも面白そうだ!」

「待て!クレイ!落ち着け!」

俺は三人で過ごすこの幸せな時間をかみしめる。

第三十話　紅蓮

リフレインの件以降、黒の騎士団の人気はさらに増すことになった。日本人が求めていたのは唯のテロリストでは無く、正義の味方だった。

民衆からの支持も得て騎士団への入隊希望者が増えて情報提供も急増している。

『正義の味方』というキーワードに引かれるのは日本人だけではない。ブリタニアによって制圧された他の国は勿論、現政権に不満を持つ者にも影響を与えている。

日本解放戦線をはじめ日本のレジスタンスを複数支援しているキョウトという組織がついにナイトメアをまわしてくれることにもなった。

メインのナイトメアは無頼というグラスゴーを日本独自に改良した機体。元がグラスゴーだけあってサザーランドにも性能で負けるおもちゃだが、贅沢は言っていられない。無いよりはましだ。

無頼が納品される日に合わせて新隊員が加わった。新人達は無頼を前に興奮し、中には自分たちはエリートだと明らかに調子に乗るものまでいた。

その様子を見て思わずため息が出る。だが軍の経験があるものはほとんど日本解放戦線に入っているので素人ばかりなのはしかがない。今はポーンを集めるときだ。ルークやビショップは今後に期待するしか無い。ポーンとてなくてはならない駒だし、成長もする。

玉城はともかく井上達古参のメンバーまでが浮かれているのも心配だった。ゆくゆくは実力主義の組織を構成したいがもとが仲良しメンバーの集まりだ。どうしても古参のメンバーに上の役職を与えなくては不満が出るだろう。そこは俺がなんとか強化していくしかない。

得意げに先輩風を吹かせている玉城達にため息をつき、横にいるカレンを見る。うん。カレンは今日も可愛い。俺の唯一の癒やしだ。

「・・・なに?・どうかしたの?」

「カレンは今日も可愛いなと思っていたところだ」
「なっ、何を急に。あんたはいつも突然なのよ！」
照れて顔を赤くするのも可愛い。カレンの肩を掴む。
「え？ちょ、ちょっと!?」
ここは流れで行くしかない！俺はカレンにキスしようと顔を近づける。
「玉城はともかく、井上達まで浮かれ気分か」
・・・・・・。
おい。タイミングを考えろ。空気を読め。だからお前はルルーシュなんだ。
「ん？どうかしたか？」
「・・・いいや。なんでも無い。気にするな」
若干の非難をしつつカレンから離れる。
「ちょっと、ゼロに失礼でしょ」
「構わないさ、カレン。私と彼は対等な契約を結んでいる。彼の実力と成果は皆が認めるとこだ」
ゼロの言葉でカレンは一応納得した。俺の立ち位置もこれから難しくなっていくか。俺がしっかり成果を出し、上の地位にいくことで黒の騎士団は実力で上に行けることを証明しなくてはならない。人間関係も含めて面倒な仕事が増えるな。
ゼロ、俺、カレンは今回のキョウトからの支援の中で唯一眼を引かれるもの、完全な日本製のナイトメア『紅蓮弐式』。スペックを見たときは驚いた。まさかこれ程のものをつくれる技術と設備が日本にあるとは。
ゼロがカレンに紅蓮のキーを投げ渡す。
「紅蓮弐式はカレン、君のものだ」
「私が!?でも今は人も増えたし、それに紅蓮の防御力ならあなたこそが」
「君がエースパイロットだ。私は指揮官。無頼は使うが戦闘の主力は君だ」
「でもそれならクレイの方が。あなただってこれ程の機体、ほしく

ないわけないでしょ？」
「確かにこれ程の機体は喉から手が出るほど欲しいが、武装もカラーも俺好みじゃ無い。紅蓮はカレンが一番似合っている。赤ってのもまさにカレンにお似合いだ。俺は今後黒の騎士団の評価をもっと上げて、俺の好みの専用機体をつくってもらうさ」
ゼロと俺に説得され、カレンは紅蓮の機動キーを握り頷く。
その後扇さんから入団希望のブリタニア人から面白い情報が提供された。
「週末はハイキングだな」